ル 7
3354

萬國新話序

天之亡窮也日月星象之大入焉而顯矣則其包括覆幬之慈外勿論已廻地之塊然中處亦奚止載華嶽而不重振河海而不洩哉五大之洲萬有之國其將具載並持而不遺焉則其廣莫豈易知者哉是以章亥之步於夏鄒衍之談擬嶽或失則局或失易修均之不獲

3354
早稲田大學圖書館 昭和25.6.26

其實漢張騫使西域足跡不能出葱嶺天竺之外元人窮河源亦至崑崙而止嗚呼地其不可知也乎獨有遠西氏之子不曠山不直地躬履歴土積年累世以致詳覈乃至其道里名號風俗物產図記周悉歴々可據復寘畫焉余世官瘍醫其所爲聚以共者多取諸蘭船之所齎而其物咸係西

洋諸國所生欲詳其物性辨其良苦國漢籍之所弗載將何以哉迺不恐吾世々苟承家技循舊自安者恬然置諸不講也則勢以不得不直就西書夫既誦其書論其事不知其地而可乎此余之所以有翻譯萬國圖及圖說之擧也家弟中良當時在側记其談餘且旁及自所涉獵事相類者不圖成

編名曰紅毛雜話已刊行于世頃日書肆来請家翁曰雜話之編実千百年未聞有若是其奇者都人士家觀戸傳施及四方紙貴以之願為論其軼事再著一編家翁則以余之因贅疣瘍造爲者日蕃有徒曰姑舍爾所學而從我驅而納諸赦療剮殺之後不能游息於藝園操觚若昔日乃笑而謝之曰廼公近志存急救濟為善汝勿馮婦宜哉答曰小人不達大人之變一班僅窺輙昧全觀自貽編纂之罪雖然平素所漸積蔚矣多文何所不富抑不入虎穴不獲虎子直探麗中得其曾所綴悦而去以幾刻成是為萬國新話余取而閲之雖則一時雜錄然於其五方萬國道里名號風俗物産庶足以知其梗槩乎則世人以家

勇爲攘臂下車亦所不恤也

寛政改元之臘月初六書於迎旭書屋閑窻

桂川甫周國瑞撰

萬國新話序

坤輿大矣辟諸一器而聚焉者多不其然乎夫羣方所分峙萬國所鬱盤河海山嶽品物馮生坱圠乎〻不周匝紛紜乎〻不密布

其由車材樸屬而徽至愼爾而下迆以為完久者以為利轉者直指者固抱者式較軹攢軫轐衡輈雜錯糾禁交倚亙持繁會縟就錫鑾和鈴又從而九十其

儀邪即令始駕而遯御陂将惴々乎唯其目眩文彩耳駭殷轔噦鏘之音是懼奚暇能察夫三材庶物之不失職與步驟折旋之比節變樂中規矩哉迺是編

之謚爲椎輪庳言儕俗無峻崇難登之艱平易質樸無眩惑聴熒之患亦比諸馬前之車奚不可乎過此以往日閑月將則豈啻殷畝可馳百仞可登哉其周觀八極一瞬千萬里者亦可以馴致也夫是爲序

寛政己酉之冬

槐園　宇田川玄隨撰

萬國新話序

而翻而之海于圖安于里
人物風土無出於左乎爲
其性味逢然羅之料而淡之
何思惠之于後世之後世者之附
月之弦維也其存而海航
維年高之用而浮之殊域
之賣者氏出欽與之可子

此書之出于法蘭國紀遊矣
予以里之書者也所以因
頗之詳之重示也異之小
洞之博物之學也出居之
小冊子之為也
寛政己酉仲冬
良庵森野達撰
東洲左洋書

例引

一 造物主の天地を化生するや地海〻合して一ツの圓軆となす海ハおのつから地體の凹陷なる所地ハ其凸起たる処にして人類居り畜獸産し種〻の草木果実を生ず是を発育といふ其地〻合て四世界となる一を亞細亞といひ一を歐羅巴といひ一を亞弗利加といふ此三世界ハ古来より有名大洲にして开闢もまさ既に久し一を亞墨利加といふ。我邦明應六年の比西洋のアメリカヘスキロフロヽンテイヒなる者始て此世界を發見す故に其地を称して「アメリカ」といふこれ近古開け初

ある地なれバ。西洋にて新世界と称す。惣て
四世界の方位（はうゐ）各國の接壌（せつじやう）ハ家兄甫周法眼
釋する所の。地球圖説に詳（つまびらか）なれバ。此書中
にハ圖を設（まう）けず。

○此編ハ四世界の内。亜細亜洲中の雑説（ざつせつ）のミを
輯録（しふろく）す。　日本。中華ハ。亜細亜中の勝地なり。
其事其説。多く華なるハ侍にあらざれども
に贅（ぜい）せず。其他（そのほか）朝鮮（てうせん）琉虬（りうきう）等のなれバ人口に膾（くわい）
炙（しや）しく聞（きゝ）なれ新（あらた）にせざるものハ着（ちよ）けず。

○書中の地名。皆明儒の釋字を用ひ。新字なれ

その他ハ國字にて書する中。紅毛雑話の例の
如し。

○促呼（そくこ）。合呼（がふこ）。引呼（いんこ）の例上に同じ。

○此書ハ誠に雑書中の雑本（ざつほん）にして一つの書
となるべきものなく書籠（ふぐら）の底へおし込置（こめおき）し或日
申椒堂の主なる者来りて探（さぐ）り出して独読独
ゑびし。頻（しきり）に上木せん事を乞ふ。予再三いなめ
ども。更に承引（うけひか）ず。やがて懐（ふところ）にしてもちさりぬ。
されバ華夷通高考。長崎夜話なりの冊子
の見ならひたるものの御伽草紙（おとぎざうし）

みん。吾よはさるるをもあべいなれとぞか
しのまふく諸ひやりぬ。

寛政改元季秋端午

萬象亭主人誌

萬國新話總目

巻之一 亜細亜之部

亜細亜洲の畧説

屋を車に駕る話

君長を斜武といふ

馬肉をくらふ話

父母を喰ふ話

葬送に人を殺す

女國の事

天下の圜

天竺の服飾
王の子を立ざる話
カナノール畧説
根樹の説 并 圖
哀樹の説 并 圖
安日河の事
南天竺の異
バサルの話 附 東方真珠
髑髏の臺 附 鹿角の臺
天下を戒指に諭する話

都兒格人の畧説
護送軍の畧説 附 駝の説
莫臥爾人の畧説
石に化する人の話
海に橋をかける話
如德亜の國史
テリアカの説 并 切鮓
死海の説
卷之二 同上
生膽酒の事

占城國の婚姻
同國の葬禮
尸頭蠻の説
酒を吸ふ話
金塔の中に九頭の蛇精怪事
真臘の服飾
寺に竈なき話
真臘の雪隠
同國の人澡洗の事
同國の送葬

陣毯の事
同國の産婦
兄弟交合して死する話
天獄の事
熱油紙搾る話
玄支の仕宜
牛紙喰はざる事
揚枝の事
婦人智恵多き話
陰茎に七宝紙飾る話

烏葬の事
聖誕の話
巻之三　同海嶌之部
爪哇紀傳
竹鎗の會の事
聖水の話
巴旦人日本へ漂流の始末并巴旦人の畧説
老人を叔る話
巴旦の甲冑
同國の家作

巻之四
象人語を解する話
桂枝吾やうの事
涅槃釈迦の話
人の血を浴る事
犀象と戦ふ
鶴の王の事
呂宋の地を伊西把尼亜に奪はれたる話
男色を禁ずる説
丁子并西國米の説

食火鷄の説
唐泊浦の孫七激浪に漂着の話
毒の木の実の説
日本人を見世物に仕る事
燒酒作り始
イリンカットの人物
死人の首を取換る事
文郎馬神の風土
同地の言語
商人の呼聲に鳴物を用ゆる話
同地婚娶の式
丁子并椰子油の價
同地年中行事
燕窩の説 附 黒坊役人を切害せし話
亞小居者歌舞する圖説
濱田兄弟智勇の事 并圖
附録
地中海の內羅得島の湊口銅人形圖話

萬國新話總目終

萬國新話巻之一　亜細亜之部

東都　森嶋中良　編輯

○亞細亜洲の畧説

家兄甫周法眼ん譯説ニ曰。天下第一の大洲ハ亞細亜といふ。西の方「タナイス」大乃の「ドウイス」杜亦斝の両大河をもって歐羅巴と堺を分ち。又「ミッデルランヅセゼイ」地中海「ローデゼイ」西紅海の間に一線路ありて。此支の海此の下にて八抜通りてあるとあり亞弗利加と壌を接へ。東の方「シーナ」支那の今の清國なり

に至る。北の方「ヌケイ江」にありて「ヱイスゼイ」氷海に隣り。南は「インデヤンスゼイ」應帝亞海に臨む。幅員廣大にして人民繁盛なり。諸の薬品。香料。玉石。珍珠をはじめ。種々の品類を産する事。他の三洲に勝れり。○三洲なるものは。欧羅巴。亞弗利加。亞墨利加をいふなり。挙げて計へ難し。聖賢首出の郷にして國土の開闢も最も早く亞細亞は人の起りし他の諸洲に先んず。○他の諸洲は上古は三洲なり。極めて有名なる大洲なり。其域を分ちて六つとす。一は「ムスコビヤ」没斯箇未亞に屬し。一は「タッタヽ」韃而靼に屬し。一は「トルコ」度尓格に屬し。一は「シーナ」支那に屬し。一は「インデヤ」應帝亞に

屬し。一は「ハルシヤ」巴爾齊亞に屬す。其外此洲に屬する海島もまた多し。其著しきものは「シベリ」止波里○北海の中にあるもの「セイロン」錫蘭○應帝亞海の中にあり「スモダラ」蘇門答剌「ジヤワ」瓜哇「ボルネヨ」勃泥「セレベス」食力白私「マロコ」馬路古「バンダ」番守「ギロヽ」及勒々「ロソン」呂宋等なり。吾大日本國も。亞細亞洲中の一大勝地なり。

○韃而靼屋を車に駕す　韃而靼國中は大てい城郭宮室を設けず。屋を車の上に造りて。居所を行きて役利とし。家民の釋說にいはく。世界中縣邑村落を分かず。

咾遮陽のごとき物を造りて。夜ハ老少男女とも内にふせけり。豢ところの獣畜まで一籠りいるとなり。是を名づけて「ホルダス」韃靼語といふなるよし。

○君長は斜武といふ 同上

国中の人甚勇を好むあまり。病に係りて没するをは大なる辱とせり。明人の説 或説に曰。「ヨハンブラア」が地球説 土人ハ性とも法暴なり。能寒暑と饑渇に耐る也。国俗其の猛勇絶倫なる者はたてて主となし。号を称して「シヤム」といふ。即チ君長の

義なりと誌せりとなん。中良案するに。蝦夷の東人。ある党の人は指して志やむといふ。是其の地満洲に接するゆゑ。韃靼の支とならば従へるなるべし

○馬肉は食はす 同上

土俗の例とも馬乃肉を嗜む。就中ある所をもつて絶品とせり。故に貴者にあらざれば食料にまつる事かなはずとなりとぞ。道は行に飢渇となれば。其所の馬は刺血を瀝らして是を飲む。又酒を好む。一ッ砕はなって栄とせ。

○父母は祭らず 同上

此國中。東北の方れ土人。父母将ふ死せんとする時ハ。
則殺して是を食ふ親の恩をおもへば腹の
の外ふ葬るいふせれ丘隴の下ふ埋るふ忍びず。
去ルま依りて腹中ふ葬ると。明人の説

○葬送ふ人を殺す 得白得

又西ホの一種ふ「テペテ」得白得といふ國あり。至大の
剛國なり。其俗國王の死後輿棺て葬送せし
し途中にて人ま逢ふ時ハ。ことごとく是を
殺す。唱ゑらく死して其王ふ事ふまつれと。
一王の葬礼乃時。人を殺すこと万をかりけく

汁へーとるり。

○女國 亞媽撒搦

徃昔韃靼の西ふ当りて女國あり。「アマサ子」亞瑪作搦
といふ者ありて驍勇ふして賊を殺し着を奪て
「子ペス」厄弗俗といふ一つの名都を責破り其地
ふ廟祠を建つ。基址を湖中ふ築くること約
四十四丈寛サ二十一丈余。内ま白石の柱大抵一百
五十七株あり。ほとんど各高サ七丈許。祠の内石像
を安置せり。祠乃四面ま四つの門あり。其門毎ふ
白石をもりて造るる橋を架る。正門の前

に累石をもて精工に畳しある神像を建たり。此神祠の経営二百二年余にして成るとぞ。宏麗奇巧なんど思議のおよぶ所にあらじ。西洋の人天下に七奇あることゝ称す。七奇。蛮語にて「セイヘンウヲンドルレイキ」といふ。即七奇の義なり。又此祠を「テンプルハンエペス」といふ。廣輿新志中に七奇の説あれども。みな誤多くして取にたらず。是其の一に居。其月ごと一度男子を容して其の地に入しめこれと交接て子を生む。産る所の子。男子なれバ輙これを去らしむ。今ハ他國に併られて唯其の名のみ存る而已なり。明人の説 家兄の譯説に曰古「イムデヤ」の西に「アマサ子ン」國あり。是も亦女國なり。今ハ亡たり。又南亞墨利加洲中に「アマサヒ」亞媽鎖といふ國あり。此地に大山あり其山中にハ婦人のミ住居す。春毎に他邦の男子が採薬に行て会歓をなすことゝし平日此山中に迷ひ入る男子ある時ハ矢庭に是が射殺すとぞ。其婦人の遺跡亞細亞洲中の女國に似たる故。「アマサヒ」と名づけたるよしなり。「アマサヒ」ハ「アマサ子ン」なり。「アマサヒ」ハ今稱なれ。是家兄譯する所の「コウランドトルコ」書名中の説なり。

〇天下の霊囿 應帝亞

應帝亞國ハ（即チ天竺五印度なり）果實多し。近年饑饉といへども。土俗これ果實を以て食に充る故。絶て餓渇の患なし。此地眞珠。玉石。其外の和薬品。香料を産せり。天が下に並ひなき所なり。故に大半此土の書に所載なる。されば西岸の人。称して天下の園囿といふ。（按るに此説文なり。葉るに吾邦の俗諺に大坂は日本の臺所ともいへるとおなじたとへなり）

○服飾 同上

昭代叢書中に牧なる者の外国竹枝の詞に。寶髻青螺錦罽裁云々

注に云。五印度の国王は錦罽を被す。髻は螺のごとく

結び。其の髪は下に垂るとあり。（案ずるに是其人の衣裳は筆紙に述がたし）又明人の説にいはく男子は衣を衣ず僅に尺ばかりの布をもつて纏の上を擁ひ。女人は布を以て首より足まで纏ふとあり。（是は下賤の者なるべし）

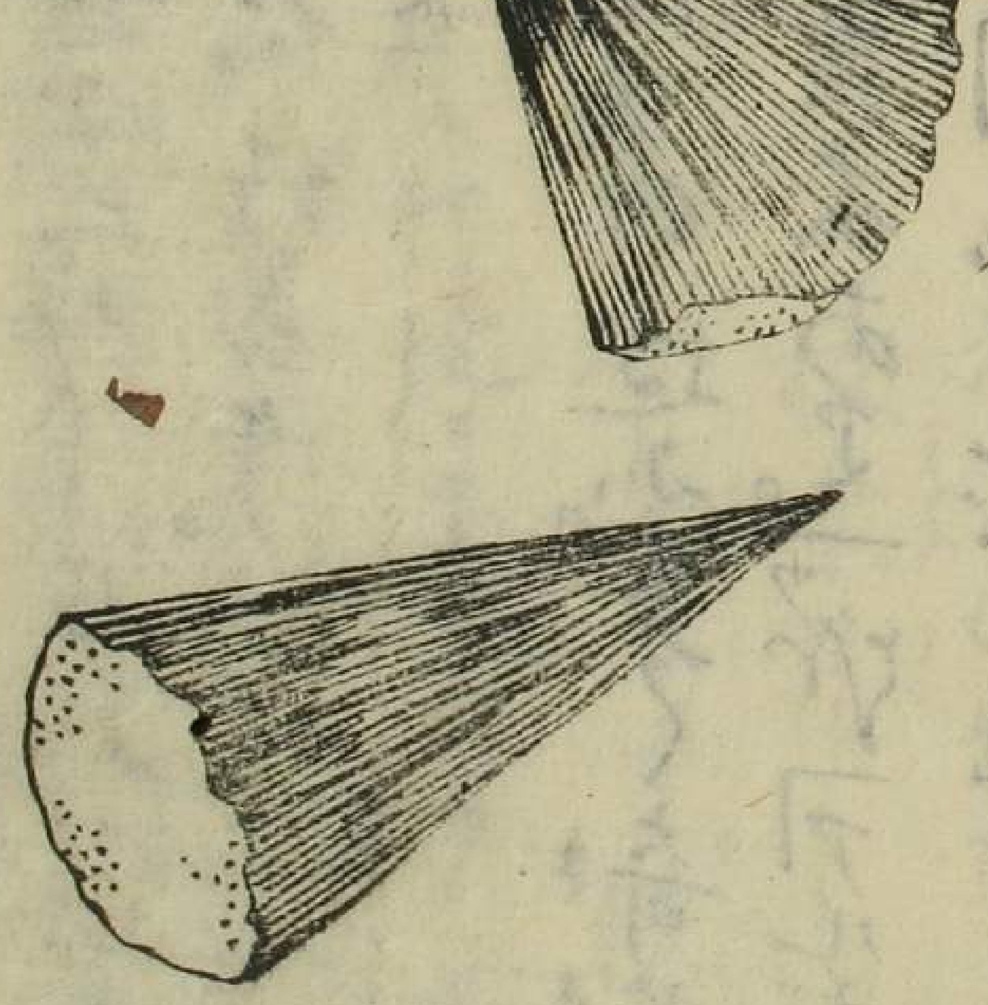
○王の子を立る 同上

明儒説なる和の万国図説にいはく。印第亞国中乃士農工賈は皆その業を世々にす。国王は父子相續なし。其姉妹の子を以て嗣とす。王の子は君位に上る事なく録を給ふて自ら贍とるのみ。新井先生の采覧異言にも此説を載られたり

○ブルートステーン　同上

印第亞國中「マラバル」麻剌襪尒に属する「カナノール」といふ地より一ツ種の異石を産ス。紅毛語にて「ブルートステーン」「ブルート」ハ血「ステイン」ハ石なり。「ラテイン」羅甸語ニ「ヨーピスハマチテス」といふ。羅甸語ハ西洋一種の古語なり。しかしくハ西洋音韻に戦しく　といふ。又赤なる石の名にもなりて「カナノール」ともいふ。石の質代赭石に似たり。鉄槌を以て撃破ぐ一顆ごとに尖なる形にして破目ハ針を束ねたるごとくの縦紋あり。金瘡衄血にて他身より血を出すときの此石を手に握る時ハ倏忽に血が止む。又出る許の鮮血の此石を削りて振かく

ブルートステーン之圖



遣バ。木を隔つといへども。血ハ通ひて神の如し
其物の外。万里に産する薬品の形状ハ。伯氏
著す所の和蘭薬選にくハしけれバ。此書中にハ。
さじねらましハ徒ほなり。

○根樹 東應帝亞

「ヨーストインデヤ」東印度の辺に多く奇草奇木
を産す。就中二ッの異木あり。一ッは「アルボルデテラ
イス」と名づけ。又「タルテルボーム」と名付く。
紅毛語にて根樹といふなり。其始生の时ハ他
の樹木に異なる事なし。さて長じて後。

枝の上に細條を生じ。纍々としてたれ垂。地に
いたれバそれより根を生じ。年を経るにしたがひて
て本幹と異なることなし。如此の数かぎりなく連
結して巨なる林となれ。枝葉蓁々として高サ
天に参る。周圍二里に及ぶものあり。枝毎に皆
細條を生じ。飄揺して地に垂たる事恰も
めぐし。細縄を掛るが如し。

○是をなづけて「ヨハニブラ」が地球略説中の説なり。伯氏これを榕樹に作り。中良案るに。絵に画く和の万里人の物の寫に。木の枝末結画くる所あり。見あやまりしなるべし。此木の生ずる所なりとて画く物ハ。此木を画けるなり。

又云此樹林をなれバ枝葉上におほひて屋宇をなし
なくも國俗その下に住居するものあり。大なる林

根樹之圖

「ドヽミヨース」紅毛本草に載る所の圖あり

同弱木之圖

我後是と小樹る之のなり

哀樹之圖

尓いたりて八千餘人を坐せしむべし。甚樹の中。原幹にを孔穿八斬て以て佛尓供ふ。菩薩樹と名づくとなり。明人の説を按るに我家の後園に此樹を植花咲ずして実を結ばしめ枝に芽出しのごとくなる小き瘤を生じ日を経に志たがひてやゝくと大になりすゝみ遂に将指のほどなる実となる。形無花果のごとくにて色黒く紫色の斑点あり。されど弱樹なる故枝上の細條地にいたらず。

○哀樹 同上

又一ッ種の奇木あり。「アルボルデリスタ」と名づけ又「ドローヒケボーム」と名附。蛮語にて哀樹といふ義なり。其花昼はひらかず夜に至て始て開く。其樹日中ハ枯れたるごとく日没て四半時ばかりして後卒然に満樹花ひらく艶麗にて見るに飽ず。其香芬々として愛するに堪たり。通宵かくのごとくして暁にいたれば尽く地に落チ。枝葉も亦枯萎む。夜々かくのごとくなれども終年絶ず。

明人の地球図説には哀樹とあり

○安日河 同上

東応帝亜に大河あり。「ガンゲス」(安日)と名づく。其人いはく。一度此の河水に浴する時は従来の罪業ことごとく消除することを得るがゆゑに五印度の人咸ありて沐浴し。こひねがふは罪障が消滅して天に生をうけんことをねがひ祈ることなり。此俗の人は皆四元行を崇むることなり。四元行の事は紅毛雑話にくはし。家兄の考に曰。漢書張騫安石国よりして柘榴子を帯来る。此故に安石榴といふといへり。安石国なるものは印度の安日河の辺なるべし。安石安日華音ちかし。

○南印度の異

「ソイドインデヤ」南印第亜の地勢三角形をなせり。其末の鋭なる所。闊サわづかに百歩ぞ東西相去ることなき。気候は殊に大反も東の方雨降れども西の方は霽天なり。此地をゑらぶるときは彼地がならず。殊に彼方は大風海を吹て洪波天をも蔽ふがごとくなるに。此方は漣漪をも立ずして平地のごとく穏なり。これ南印第亜の大異とする所なり。○明人の説

○バサル 附 東方真珠 巴尓斉亜

「ハルシヤ」巴尓斉亞國よりは玉石駿馬絨緞を出す。又奇獣の「バサル」把雑尓。又馬猿などいふ。○帰于熊甚なり。絡ハ馬皿。を産す。此物は「ベゾアル」といふ獣の腹より出るものなり。○獣の形羊のごとく鹿に似たり

此國の海中。「ヲルムス」忽魯謨私「ハツラス」等の嶋々より多く真珠を出す。西岸より出るは東方真珠と称して殊に貴ばれ。其他「バレム」「カヒ」「ユルハル」等の諸島も亦多くこれあれども。各所にて採得る所の者皆「ヲルムス」に輸す。土人裸體にて腰に小さき籠を付。海中に没すること二十尋餘たゞちに海底にいたり。真珠母を拐出し日中にこれを晒し

其の貝の口より[illegible]纏て真珠を取ることあり。伯氏の説

○髑髏臺　附　康角臺　同上

當時百尓斎亞國王一ッの臺を建。是戦ひ勝たる敵の同々國人の頭を聚て築くものなり。（同々國の事 采覧異言中に説あり。）東西ともに同く西洋の地圖又は地志あるもあり[illegible]。又大に[illegible]して一閣を康角を獲事三万。其の事跡を後世に傳へんために康角を集めて臺となし。今なほ存せりとなん。明儒訳ある所の万國圖説中の説

○天下を戒指とす　同上

都兒格人之圖

紅毛鏤板の万國地圖ならびに各國の人物を圖せる書中に載る所なり

都兒格は世界第一の强國にして。亞細亞。亞弗利加。歐羅巴の三大洲に跨る。もとより亞細亞都兒格。歐羅巴都兒格。亞弗利加都兒格といふ。[illegible]王を侵し奪はんとて。今に戦闘やまず。諸洲甚患とすといふ。頭を包むものを「トルバン」といふ。其近邊「モゴル」「ハルシヤ」等の國も皆是を用ゆ。兼てさしたるは「ストロイス」といふ鳥の羽なり。手に持たるを「スタフ」といふ。即ち笏のたぐひにて人を指揮するものなり。

護送軍之圖
同上

巴爾斎亞海中の明人の黙生丁海と称するもの是なり。忽心魯謨斯ハ小島なりといへども。亜細亞。歐羅巴。亞弗利加の中央にあるがゆへに。三大洲の富商大賈つねに往来するがゆゑ百貨騈集し人烟輻輳そ。海内の珎奇をあつく致しぐされその有りとも。貨の物あらゆるより。いと安く手に入ると我土人いへらく若天下ハ一ツの戒指なりとへて吾忽心魯謨斯ハ戒指の玉なるべし。宝石いれ所なるべしと自負するとなり。

明人の説

○護送軍　附駝之説　亜刺皮亜

「アラビヤ」亜刺皮亜國ハ「トルコ」都児格に屬る國中にて。數百里の郊原ハいづくを涯とも志らぬ沙漠多し。此邊ハ國を通流する商旅。又ハ如徳亜國なる馬哈黙の廟へ（馬哈黙といへるハ西方の聖人なり。其ゝ州る和の為ハ中華にいへる聖教なるものなり。其法を尊まもる人ハ西洋にてハ「マゴメター子ビ」といふ。此廟ならびに其遺跡をおがまんとて如徳亜國へまうづる人多しとなり。）參詣する旅客。亜刺皮亜人の掠奪を恐れ黨を結んで往還に是を守護して路次の乱妨を禦ぎめんため。近國より見送り乃甲卒におもとなり。通商の旅人並に警固の軍勢。あはせて四五万人より七八万人に及ぶとのなり。糧米行李ハことごとく駝に負せしむ。見送り八九千人なりとぞいふ。見送の軍兵いづれも甲冑を帶し兵器を佩すなれバ胡塵にあさんと。武を張り勇を逞くし。隊伍を乱さず押行く事さらに行軍の形勢におとらずぞ。其内地理によく水草に在所を知りたる人が案内とし。或ハ其余近き所り野沢をもちてするに。ばらくの旅行ハ今も見送の軍兵の力に倚よりなれバ。往還せられるなり。

又亜弗利加洲の「アレキサンデリヤ」亜礼機山的里亜より。都児格比都へ（此の名とハ公斯當丁那波里より又紅毛穀語を載る）往来の海上ハ。海賊を防く為の見送軍をかまもなり。此見送の軍兵の事

と。紅毛にて「カラハー子ヒ」といふ。譯して護送軍といふ義なり。南兒杭ヲ云ふ所の「コウラント」トルコの畧說なり。明人ハ「カラハー子ヒ」を防寇と譯せり。海沙場を行に駝を用ゆるハ。此獸百貨同の荷物を負ひしとせず。晝夜馳て労るゝを志らざ。其脚長が故に沙漠を行に足えれりよし。一日に麥麩子の大サ芋魁ほどなるを五ツ六ツ食し。又乾草を齢。ゑハ十日ほどゑぢるに一ト度飲を後中能ゑを行りふよきて曠地のかす水に乏しき時ハ二ゑ殺を剖て其を掬清冷にして飲に堪ゆりとぞ。其骨肉皮毛ことぐく藥用に充。形狀主治ハ和蘭藥選に詳なり。本草の說ハ甚粗なり紅毛語にて「カメール」といふ。舶来せる「テレーピ」といふ綾天鵞絨のぬき毛布ハ。此獸の毛をもて織る物のよし。なれども志らざる時ハ甚益ある獸なり。吾邦にても荷駄馬のかはりにつかひなきことなり。周ゆにいふ「テレーピ」ハ。蠻人の氈毹に用ひる料に織物なり。好事の人烟包。挾囊などに作りて持料とする事なれ。

○莫卧爾國

明儒の說に日五印度の内。南印度のこと古ハまて

莫臥爾國男子之圖

此圖ハ「ヘレンテイヒ」ト云紅毛書ニ載スル所ナリ

同婦人之圖

なりて。其餘の四ツハ皆莫臥爾に係せらるゝものなり。
西印度ハ王兵五十万。馬千五百。象二百ばかりを出し
て。莫臥爾の軍を禦ぐ。其象の脊に一ツの臺
を負せ。内に軍卒二十人ばかり容るべし。また
鳥銃千門のうち大なるもの四門。其の大銃なる
ものハ牛二百頭ばかりにてやう〳〵一門ばかり載る。
其外百万の軍實を出し。諸物をそなへして防ぐ
といへども遂に傷来るバすして莫臥爾の
麾下に手を束ねしとなり。今に属せる所なれ
莫臥爾人の畫ハ。紅毛画の臨写なり。采覧異言

小曰其人赤髪緑瞳なり。男女皆白紀布をもりて
頭をまとふ。衣ハ領なく窄袖なりといふ。世界図
莫臥爾國の華美に及ぶものなしと。紅毛人の
いへるよしなり。西洋にて着する所の金緞花緞
ハ大抵此国にて織るところのものとぞ。我邦に
毛織と称するものハ彼国の織物を摸て織る
なり。

○石人 納多理亞

「ナトリヤ」納多理亞 國に山あり。多く瓊を産す。國人
往てこれを鑿するに日一ツの石穴に入り中を見

是ハ石人数かぎりなくありける。是昔時乱を避る民ども爰に穴居せしが死して後そのまゝ凝かたまり化して石となりしなりと　○明僑の説

又先年蛮書を見しに内は大なる石窟の内に。十字形になしたる死人数百立てありて。人みなて其死骸がかくれあるさまの画図をあらはし書の名をも忘れたり。されば彼石人の図なるべしや越後地国にある弘智法印も石人の一種なるべし。

○跨海石梁　同上

那多里亞と。都児格の界海をへだてゝ僅一歩の間に至て近し。むかし那多里亜王失尔塞なるものの大軍士石の切組し海に跨かる石梁をかけて支那と通運す。後代になりて風浪に衝撃せられ其梁頽廃せしとなり。　○明人の説

○如徳亞の國史

明人の説に云く天下の諸国に。上古の事跡を記する史多しといへども。いづれも其事の八千年を記せるも三四千年になるのみ。其史おほくは混沌時よりて訛謬多し。ひとり「ジユーデヤ」如徳亜國の史書ハ

开辟よりして六千年来世々の史官筆を絶ず歴代の事実並端を記すれば委曲分明にしていさゝかも脱漏なし。

○的里亜加　同上

如徳亜の西に國あり達馬斯谷といふ。土人一ツの薬を製す。甚良なり的里亜加と名づく。能百病を治す。もろもろの毒を解く。此薬を試るには先その毒蛇を覓めて身体を咬傷し其毒発して腫脹時その薬を少し許嚥るに即愈るといふべし。各國にて至て珍異とすと云々　明人の説 本草綱

目に底野迦苦寒にして毒なし。百病中悪客忤邪気心腹痛積聚を治することあり。集解に蘓恭曰。西戎より出づ。彼人これを猪膽を用て作ると。形チ久壊の丸薬に似て赤黒色なり。○桂山先生の説に曰。華人のいへる久壊丸薬ハ即チ煉薬のことなり。彼邦ハ皆蜜丸にて彼邦のごとき煉薬と云ものハなし。胡人より多く持来る。甚これを珍重す。用試るに効ありと載り。癸仙丹ハ西岸の人常に用る所にして。起死回生の妙薬なり。吾邦にてハ多く蜜柏比齎来るものを覓得まほしくおもへども極めて得易からざる煉薬なり。ワづかに痘瘡の死に及ぶる

者に而已もちゆる事として。功ハ他病に試ける
ことハあさしハ。其船来の物と称するも多くハ贋
物にして真物ハまれなりといへども丈を尤ひ
ざるまでにて。志ろと真偽を弁ずる人もなかりき。
時なる哉二十年来。前野蘭化先生のいさをしに
よりて。東都の諸子蛮書を読得るものあるに
てより。「ショメイル」書の名に載る所の的里亜加方を翻
訳し。紅毛人「テリアカアンドロマアカ」といふ。又「テリアカ」ともいふ。其の上近比西客の口授を
交て此薬を製し。志るしく経験ある事を得に
いたる。偏に是昇平の巨澤なり。的里亜加諸方

の中に。一千種ばかり「アルムテリアカ」なるもののあり。「アルム」ハ
蛮語貧の義なり。是薬剤は高貴の名高き
高貴の名をかしたり。それを簡易
にして志るも其功上好の薬品多味を調へて製
たるものにもおとらず。蕃舶蛮人の携来るものの
なるに大半「アルムテリアカ」なり。今は巨細を弁ずる者
なりけるも。ちかく諸豪傑蛮書を訳し。古丹薬
を製する事を得るに依てなり。豈愉快なる
るにあらずや。我か邦常に製して博施し。多
く是を経験するに。船来のものとかくる所

りとよき諸病に用ひて効あれども目のあるを
よく強をかる不死のごとし。
汗を発し眠を催し。疼咳頭痛によし。嘔吐
下利をとゞめ。痀隔ふさがりたるをひらき胞を
ぎして元気安からざるを止め。癪痛疝気
其他もろ〳〵の痛を和らげ。食毒酒毒を解し。
痘瘡麻疹にもりよく功あり。熱て熱気甚だ
病あるハ能ふてきき用ひ。方症の瀉発にまかす
しあり。癲癇。痃癖。疫癘によし。熱のさし
引あるものハ。焼酒にてときかゆにぬるべし。疔毒。

便毒虫さし等。及風犬の咬傷たるに火酒にて
ときて塗てよし。癰疽発背癜瘡に用ゆべし。
大人ハ木穂子一箇ほどとり。病によりてハ二箇ほど
も抜るべし。小児ハ黒豆一粒ほど薬にても白湯
にても送りて小児ハ何病にも用てよし。

○死海　同上

同國中に一つの海あり。其水ことの外鹹く。凝結て
松脂のごとく。縄く波浪を揚げ。大木大石錨の
のたぐひを投入れども沈むことなし。力を極めて
押入れども没る事なし。されバ。國王かつて

人をして沈ましむるに入りぞして止む。海の日に映ずれバ五色の文彩をなす。また海中水族を生ぜざるによりて死海と名づくとなん。紅毛人ハ「ドーデゼイ」といふ「ドーデ」ハ死なり「ゼイ」ハ海なり。中良案ずるに此海ハ石脳油の一種なるべし。石脳油なる者ハ火脉に由れる地中小瑀琅を生ず。造ハおしくを溶蕩てしきものとなるとなし。蛮説未少及べり。

萬國新話巻之一

萬國新話巻之二 亜細亜之部

東都　森嶌中良　編輯

○人膽酒（いきぎもざけ）　占城

東西洋考に云。むかし占城（ちやんぱん）の國王。古の越裳の地なり。秦の時林邑といひ。漢の時象林といひ。又區連叙といふ。酔ありて人の膽（きも）を採（とり）。酒に入て是を飲。又是を以て浴（ゆあび）。通身（こゝろ）が膽（きも）なりといふとなむ。中良案ずるに。此膽ハ真臘（ゑらう）國より送るなり。真臘風土記に云。毎年八月の中に占城王人の膽千余を残索（かうさく）。

去れに依て嘉𤣥王夜ごとに人を城外に出し。往来の人にあれバ。縄にて作りたる兜の如きものを頭にかぶらせて引経め。小さき刀を以て右の股下を裂て膏を取り。数の足を揃て古城王に償となり。

○婚姻 同上

此國にて嫁娶ハかならず八月をもちゆ。女の方より男を求む。同姓を娶るとあり。東西洋考の説 北史に曰。媒者をして金銀釵酒魚を齎せて女の家にいたらしむ。夜において吉日を定め其日になれバ男の家にハ。親族を会して宴を設け。女の家にてハ。一人に婆羅門を請じ。婆羅門ハ異姓の法師をいふなるべし。紅毛談話乃説合せ見るべし 女を引て男の家に至らしむれバ婿盤手て出迎ひ導て是を投るとなり。

○葬禮 同上

隨書に曰。王死すれバ七日。百官ハ三日。庶人ハ一日にして葬る。函の内に屍を入。導従人ハ鼓を打チ舞踊て水辺にいたり薪を積で屍を焚。其骨を王ハ金甕。百官ハ銅甕。庶人ハ瓦甕に収めて海に沈むるとなり。葬送の時。男女皆髪を截て随ひまかり。

に追ひて哀を尽し帰る時ハ更に患せず。七日ごとに多く焚花を供じて後炙も。甚だしきに至り七々四十九日にして罷となん。

○尸頭蛮　同上

星槎勝覧に云占城の尸頭蛮ハ婦人なり瞳なし。深夜にいたれば其頭飛去りて人の穢物を食ひ。飛かへりて復體に合ふことごとし。若其頸を封じ固あるひハ體を別處に移せば即チ死す。病者糞あり除む時其糞に遭ば妖氣腹に入てかならず死すと云〻。外國竹枝詞に。

那堪黒夜遇尸蛮

と詠じたり。注に小児の糞尖を食ふといへり。此歌を以下此説ハ此國の事にあらざれども因に記して児童の耳を悦ばしむ。太平廣記に云山谿南の渓洞の中に飛頭の者あり故に飛頭獠子の名あり頭飛んとする一日前より頸より頂へかけて紅の線のごとくなる筋あれバ妻子ども是を看守に及で状病がごとく頭忽身を離て去る。まさに岸泥に尋いて蟹蚓の類を食ひ。暁に将として飛還れバ。夢の覚るがごとく其腹實すと云〻。又南方異物志

に云。嶺南の溪洞に飛頭蠻あり。其の項に赤痕あり夜に至りて耳を以て翼となし。飛去て虫を食ふて、三才圖會に云。大闍婆國の中（中良案ずるに闍婆國は爪哇の古名なり。）にを飛頭者あり。其人の眸に瞳なし。頭能く飛ぶと云。瀛涯勝覧に云。屍致魚と號る者は。乃ち婦人なり。其目に瞳なし。夜寝る時は。則ち頭飛て人の家に入り小兒の穢を食ふ。氣小兒の腹に侵せば必ず死す。中略　夫その婦の飛行するを疑ひ。匿したる者は。罪家屬に及ぶとなり。（是は眞臘の飛頭の事なり。風土記には其説なし。）贏虫集に云。老撾國の人（占城の近國なり。安南の西北に接す。）鼻に水漿を飲み。頭飛て魚を食ふと云。吾邦にては

俗に轆轤首といひ。西國にては拔首といふ。中良案ずるに。琅邪代醉に元の詩人陳孚なる者。甞て安南に使せる時。紀事の詩あり。

鼻飲如瓴甋　頭飛似轆轤

けだし轆轤首は此詩にもとづけるならん。予往年相州鎌倉に遊べる時。長谷の辺の町家にて轆轤首なりといふ婦人を見たり。頭に赤き痣ありけるを見て。何者か流言を云出しけるなるべし。元は拙人の妻なりけり。いかなる多年住ける新宿の女なるをありき。（○飛頭の事は博物志捜神記等にも説あれど此には略す）

○酒を吸 同上

東西洋考ニ云占城國の人。酒を甕ニ醸し。熟する時ハ賓主かの甕を繞て坐し。三尺ばかりの竹筒を插て輪次ニ吸盡し。またいさあそてハ水を注ぐ。是を吸ふ酒の味なくまて止となん。

○外國竹枝詞ニ

三尺竹竿輪灌酒

かく詠じたるハ是なり。

○金塔の中ニ妖精 眞臘

眞臘國ハ占臘と称し。亦東補塞ともいふ。占城の西南にして。應帝亜の属國なり。至て大豪富國なる故。唐山の諺ニ富貴眞臘といふ。竹枝詞ニ

富貴無及眞臘強

とさへ詠じたり。城の周圍二十里なり。宮室の美麗言語を絶するとなり。眞臘風土記ニ云宮中ニ金塔あり。國王夜々其上ニ臥す。塔の中ニ九頭の蛇精ありて女身なり。是土地の主なり。すなはち毎夜國王と交媾す。其妻といへども敢て入事なし。二鼓の後宮より帰りて妻妾と同じく睡る。若此妖精見ざる時ハ。國王の死期ちかきにありとし

蕃主一ト夜住されしかば、たちまち雨ふり災禍を獲しとぞ。

○直臘の服餝 同上

風土記に云、國王より以下男女いづれも椎髻にて祖裼なし。布を以て腰を囲む。出る時ハ纏巻の上に一條乃大布を被し纏ふ。此布に等級ありといふ。百姓ハ女子ノぐくり此大布を用ゆる事をゆるさず。國王の用ゆるものハ直金三四両なる物にて極めて華麗精美なるもの多く、暹羅占城にて織る。或ハ西洋にて織りたるを上好となす。國王ハ時に依りて金冠を戴くこともあり。纓を加へざる

時ハ茉莉の花を採り、纓にて結びて頭髻に匝し、項の上に大なる珍珠三斤ばかりを戴く。足ハ先錢ともに跣足なり。○華夷通商考に中よりも濃くしたり。貴人ハ男女ともに臂に金鐲をおび、指に指環をさしたり。全ちに擅麝を塗り、手心と脚底を紅なる薬にて赤く染むれよ。百姓ハ婦女子ぞなと染る事を許さず。

○寺に竈無し 同上

同書に云、僧を苧姑といふ。剃髪して黄なる衣を偏袒右肩に着し、腰に同色なる裙を纏ふ。足ハかよりも跣足なり。毎寺ハ尾蓋にて堂の中に紅

の衣を穿る。釈迦の如き状の佛像安置して塑る
小泥像以テ飾るに丹青を以テ是ハ塔中乃仏ハ
銅を以て鋳るもあり。鐘皷鐃鈸幢幡宝蓋
なたぐひ飾くあり。僧ハ皆魚肉を茹ふ。酒ハ
決して飲ず。仏にも魚肉を供へ寺中に厨も
竈もなし。日々の斎ハ皆斎主の家より与ふ。誦
まるる所の経巻ハ貝葉を疊で齋整に仕（貝多羅の木の葉なり）
立て其の上へ何までも乞を書くや速こと経文ハ紙なる
文字ハ回鶻字のごとし。

○此国もそハ官府の文書より平日の書なとまで。麻の皮を薄く漉する紙。又竹の木……
小経ひて多くに識。白堊のやうき物まて書状せり。……
に経房もろもろの人。文字ハ上より下へ書下まで縦より左へ向て書くなり

○雪隠　同上

同書に云土人家毎に坑を堀りて溷とす。糞満れバ是を填まし別に坑を堀る。（此国にてハむさきを嫌ひ田畠にも糞を用ひずと也。）和らげ溷に登りて既に畢る時ハ池に入て尻を洗ふ。熱て不浄のてのハ也ハ左の手を用ひ右の手ハ飯を拿て喰ふが故なり。此地へ漂泊の唐人溷に至りて紙を以て尻を拭バ土人これを嘲笑ふとなり。中良案るに

○風土記の説を閲するに真臘人大抵ハ黒坊なり（宮人のやうに至りてハ其色玉のやうく白きものありとなり）。紅毛雑話に記せる鬼厠より出て尻を洗ふ条。交に合せ見るべし。又右手を以て食らひ。

たゞ其ゆゑむ事し。此浴と異なり。是ハ地方に
よりて差別あるにや。又安南などの其處ハ東南亜の近傍ハ。土俗千金乃灸之ある此の土人なるべし。土俗ハ猶有なる是
されハ。男も人の下くとなり日本へ来る者ハ。今さきなるべし。

○真臘人の澡洗　同上

月書に云土地ちかふぐ苦熱なるが故に土人日毎に
浴をなし。浴室盂桶の類有事なし。家ごとに
池を掘り。男女いづれも裸形にて池中に入。婦人ハ
左手にて牝門を遮のこすれども。父母なるびり
高年人池に在ぐ子女早幼ハ斟酌して敢て入
ず。子弟の池に在とき。高年の人も亦志りく或時ハ

城中の婦女二三五々にて城外の河邊に至り纏ふ
布を脱去水中に入て澡洗ふ踵より頂にいたるまで
いさゝかも隠す所なし。動もすれば其人数千なるべく
数ふべし。此内に府第の婦女も交るとなり。唐人
此地に旅寓する者。これを以て遊観の楽ミとす。大
抵城外の大河日として此事あらざる日なし
といふ。河の深さ漂ふ志て湯の如し。唯五更の比
微しく冷なれども日出に至れバ又温になるとぞ。
土人交接の後ハ。直に入て澡洗し。痢を患る。亦池に入て沐浴
する者多く。疾を発する人もなきことなり

○送葬　同上

同書に云人死られば。筵席の銘を以て包み。布をもつて是を蓋ふ。無物葬の時ハ旗幟をたて。鼓楽して送る。送るべき米の妙なるを拋撒すとなり。是より纏外の人姻ありける所に葬る。死者を引出して甚不は棄れば。犬鳥のたぐひ群り来て忽ちに食ひ尽す。子弟されを見て慎でいはく。父兄生前に福ありし故に此善報を受とし。食ひ尽されずば愁ていはく。前世の罪滅せざりしが故に此悪報を受とまり。忌拔の制あるなし。男子ハかしらの毛を残し。女子ハ顖門の髪を剃落す。

残の大せぬし。是を以て孝とするのみ。

○陣鍈 同上

同書に云土人女子を産る時ハ。父母あれを祝していはく。願くハ汝将来千百人の丈夫に見まみゆる事を要せよといふとなり。此地の婦人至て多淫にして。冨室の女ハ七才より九歳を限り。貧家の女ハ十一歳までを限として。僧に請じて道士を乞て童身を破らしむ。名づけて陣鍈といふ。けだし官司毎年四月の内一日を擇みて陣毯の日と定む。陣毯を行はんと欲する家より。官司へ願ひ出れば。官の

上巨燭に刻畫せる者あるふ。これを行ふ長け燭を
點し。火刻画の正に燃るを陣鐘の時刻と為す
なり。彼定日より一二月も前より。女子ハ父母ハ處々
の寺觀を行あるきて保結の人を擇ぶ。有徳の僧
道人ハ大抵官府監室に先ち給ありてなるべく貧者
なとのまに及ぶぞとなり。粉の外に酒米布帛檳榔
銀器など。

檳榔子ハ始の應ぜ交るを蒟醤といひ。又賓門薬銭といふ。味ひ滑爽みして牟をおし。穀を消し。熱て吐をせしめて八拂身あるなり。長遠へ來る里路も命ふをあり。おそる來者の時ハ。出立るれども気るる。むも草細目南方草木状に載る。五彩細小四徳を擧く。碑る八絲碑に安碑る八絲碑なく儀る八絲絶えあ。飽る八能饑ゑむとあり。又東西洋考に云右城玉出る時ハ檳榔盤を持る者前立に象むとなり。

唐山の銀目に積りて二三百
支度物を贈る。勿論家の豐儉に随ひて多少ありといふ。

ならしめてハ此嫁物の多しきよりて。女子の十
一歳に及ぶまで手代のなるなりき。金銀を擲て
貧女の陣鐘を助力する人あり。是莫大の善根
なりといふ。保結の日ハ親族近隣を集て大に
宴を設け。黄昏にいたれハ轎傘を調へ鼓楽し
て僧を迎ふ。寺中綵帛をかざり床二脚を
設く。一脚ハ長なるぞ女を坐せしめ。一脚ハ僧を
坐せしむ。是より。客鼓楽して酒を酌む
うち。巨燭の火刻画の所に至れハ僧女と俱に房
に入て手を以て童身を去る。實に交媾するとぞ。

いへども華人ハ見たる所なれども。さもあるべしと詳(つまびらか)ならざるなり。女其紅(ち)を取て酒に納(れ)父母親族これを額(ひたひ)上に點(て)じ。或ハ口づから嘗(なむ)るともいふ。天まさに明なんとする頃ひに迎(むか)へ来りて時のぬくふあたゝめて僧を寺中に送り返(かへ)し。他日女の両親布帛の類を調へて彼僧の許へ行婚姻の礼を贖ふ。ただちに此いそハ生涯他へ嫁する事なるハそとなり。陣毯の前まてハ。女子ハ一(ひとつ)親の傍に卧(ふ)さしむ。陣毯より後ハ房(ねや)の外に伏(ふさ)しめ人の傍に男子に接(まじ)ハしむ。嫁娶(よめどり)の時納幣(ゆひのう)の式ありといへどもされバ

甚簡易(てがる)なりとぞ。多くハ好合(まびあひ)して後娶(めと)るとぞなり。陣毯の夜ハ一巻(ひとまき)の中に十数條も有るよしなれども僧に来て近する人数あり西行に交錯(かきちがひこ)撲楽(がく)の事處(ところ)として定まらるゝなりしと聞。中良案に三才圖會に載(のせ)る説ハ甚だ遠し。女子生て九歳にいたる時。即(チ)僧ハ請して僧経を誦(ずん)し梵語(ぼんご)を催したる鉄ので童(どう)女(にょ)を挑損(てんそん)し

。。寺嶋良庵が和漢三才圖會に此文を引てところの女を挑損せしめと訓ぜらるハ誤なり。是ハ名目なれバやもり字音に讀べきなり。よろしかるべし。

甚紅(ち)を取て額(ひたひ)に點じ。母もまた額に點じ噴ぎて利市(まし)と為(なす)と云。此説初め見る所ハ非なるに似たり。利市ハ暹羅國にて婚姻の時乃礼なり。回

もとく半も似たるより。利市と陣銭を混じたる
なる也（次に記も暹羅國贈礼の條を見るべし。）外國竹枝詞の注。東西洋考等に
況いづれも陣銭と利市とハ異なるを。

○産婦 同上

同書に云婦人出産の後。熟飯に塩を抹て陰
戸の内に納れ。一昼夜おきて除き捨。かくするが故に。
産後忽ち平日の如く。亦上陰門收斂て。多産の婦人
も。常に室女の如しとあり。周達観（元の世の人。真臘風土記の撰者なり。）
かりて是を疑ひしが。後彼土に至りし時。旅宿せ
し家の婦人。夜中子を産も。翌日に至り。産所の

嬰児を抱きて婦女と倶に河に澡洗するを
見て。始て産婦の無病なることを知りしとぞ。此
國の婦人ハ多淫なり。産後一両日をふれバ。即ち
夫と交合をまつ。連添所の丈夫虚弱にて淫慾
を遂ることかなはざれバ。妻の方より男を見限り
決絶をとげよいへるとあり。生嫁するもの有りさ
よく産育するにかけやすきに依て。也此裏なる
事も亦なし。二三十歳の婦人ハ。唐山の四五十
歳の女子の如しとぞ。

○兄弟交合を 同上

同書に云。東門の囊に任ずる夫婦人、その姉を犯し
しとあり。皮肉粘て離れず。三月を歴て死しける
とあり。吾 邦伊勢の神領にも。猥に淫するを
犯せる者。かゝる神罰を受る事あり。恐るべし。

〇天獄 同上

同書に云。争訟の曲直を弁ずる事能はざる時は。城
中に十二座の石の塔あり。公事人の告人被告を。
一人づゝ此塔の中に座せしめ。両家の親属にも亦
隄防らしむ。かくして一二日あるひは三四日の間。
飢あるものゝ中に瘡癤を生ずるか咳嗽

か熱病を附りて所に出る汗を穢理なるの者は。
纖毛も容赦なし。是にて邪正を判断する。是を
名づけて天獄といふ。

〇熱湯を探る

同書に云。人家物を失ふ時。まさしく盗みたる
といふ人を吟味するに。其実否分明ならざる時
は。銅の鍋に油を沸かして其人をして手を伸て探らし
む。盗みたる人は。たちまち腕膚損し。盗ざる人は。
皮肉何ともなしといへり。吾 邦の探湯に似たり。

〇嬰兒 同上

同書に云。此國官は禁ぜられし丈足を纔る時ハ。業二本に書丈の足を挾て足を綴る。こと痛甚かべらしむ。姦吏資財を出して正丈にあたふれバ。赦得して出さしむとなり。是國王よりの刑杖なれバ。行ふ事なきなり。

○牛を喰ハず

同書に云。馬ハ甚矮くして小し。牛ハ甚多く生ず。若牛死すれバ敢て其肉を喰ハず。又敢て皮を剥ず只そのまゝに磨爛せしむる也。いける時ハ人と與に力を出すがゆゑなり。

○華人も朧に逃る

同書に云。古朧國中衣裳を着ず。その上米穀求易く。婦女好やすし。屋室造り易く。當用足易く。買賣物やすきがゆゑに水主の唐人此國に逃て着多しとなり。

○楊枝　同上

隨書に曰。直臘人毎旦澡洗の後に楊枝を以て齒を浄め經文を讀誦して後まさに澡洒し。丈より食を喰ひをなり。楊枝を取て運び浄め又經を讀となり。

○婦人智多し　暹羅

東西洋考に曰。暹羅ハいにしへ赤土。および婆羅刹地といひし地なり。暹羅船ハ晴に乗りて長崎へ来れバ。乾きて人物をそこなふ人多し。此国の婦人ハ志量男子にまさる故に公の政事より自余のことにいたるまで悉く婦に計りて其裁決を雖とるなり。婦人は往々に旅泊の華人を見れバ。意を通ず置酒て款接し。留宿せしめて狎むつぶ。丈夫も禁ぜざるなり。あさましきことなり。竹枝詞に

女兒斷事男兒聽　偏愛華人夜々嬉

と詠ぜり。同書の注に云華人を愛さる婦人の丈夫。いさゝかもきらはざれど。吾妻美なるが故なり

中國の人も喜愛さるゝと人にかたるとなり。

○陽物に七寶を飾る

五雜編。および外國竹枝詞の注に云男子年二十歳の時陽物を割て金銀珠玉を挟ありてある藥を以て封じさる象嵌に入るとなり。行時ハ鏗然と聲ありといへり。又三才圖會に云男子幼より陽物を割て八宝を嵌し以て富貴に衒ふ。然らざれバ女をあたへて妻とせしむる事なし。しかれども。二説いさゝか異同あり。中良案るに南亞墨利加洲中の字露國の人珍寶を以て面に嵌さると表裡

の淀なり。

○鳥葬 同上

東西洋考に云貴人死すれバ汞を以て灌し。高埠に葬り塔を建蓋をなす。貧家ハ鳥葬にも竹枝詞の注に云人死れバ尸を将て海邊に置バ。犬并鵝の如くなる鳥飛下りて食つくす。其餘骨ハこと〴〵く海中に棄。されバ鳥葬といふと志るせり

○暹羅國の婚禮 同上

同書に云婚礼の外ハ。良家のうち群侍婿を迎て女家に至り侍女の紅絲を以て。婿ハ家に踏むるをわけて吉祥とも云。竹枝詞の注に云侍童女の喜紅絲詩て男の家に踏ども。これを名づけて利市といふとなり。上の説とハいさゝか違へり。

○聖鉄 同上

此國の人肢勁悍にして水戦を善す。大将ハ人の腦骨をけつめ〴〵身を裹む。（其備ふること聖鐵を用ゆる者あるにや。彩主が聖鉄を簇まつる風俗に見ゆれハさもあるべし）是を名づけて聖鉄といふ。刀矢も入ることなし。また星槎勝覧に曰。檳榔の木を割て標鎗を作り。水牛皮を以て牌を作るとぞ。

標録ハ此近國。眞臘占城までも皆有らむ。中良嘗て聞り。此頃に泊せる暹羅人蛮船華舩に物線をかけしを。こやつにあるへからずとて。斧を提て海底に潜り。船底の線を切らんとせしが。其線の纏繞するに。水練に熟したる者も。是線にからまつて死すべし。

右占城眞臘。暹羅の三國ハ。広南亜の属国にして古中華へ入貢せし地なり。此方唐土の西南にあり。花蓮的印第ニ。（西洋より東洋まで記行の蛮書なり「ハレンテイヒ」ハ帰記者の名にて書目とせしものなり。）紅毛人の説話ありといへども。さまでの珍説を得ざれハ志るさず。

華人の説ニ二線拾ひて。重紫の看り呈する而已。

萬國新話巻之二終

萬國新話巻之三　亜細亜海嶌之部

東都　森嶋中良　編輯

○爪哇紀傳

爪哇國の都を「パデイヤタラ」といふ。國王一日筵席を促して大に雜劇をなさしむ。これより殿の外に一人の童子盤桓せり。忽管絃の音をきゝて甚場より足を一チ逸せまくるひ守門にしばらくの中をへバ守門の長叱して曰彼處

汝ぬき少年者の性癖れ不所にあるぞと。眼を
怒らして睨みければ。彼童ことともせず微哂
ていふやう。汝等いかやうに吏ゆるとも。我蹤越ても
彼所に到るべしと。頓て殿の門へ入んとせし来
此童子の父ハ鍛工の長にて。此処に居合せける
が。此様を見るより。走り寄て引留め或ハ叱り
或ハ宥めて留めんとすれども。つゐに之を振
放して殿門に跑入り。彼雜劇の場へ行んとせ
しが。われとても不案内の事なれバ。謬て道を
違へ後堂の方へ参りて見れバ。堂上に一ツの楽

器を飾りたり。名を「バレサアル」といふ。（此制度つまびらかならず）
此器なる者國中の重器にして。国王の外ハ
みだりに觸ることを許さゞる物なり。しかる
を此童子ハこれを齎して堂上に昇り。折節
傍らに人なかりけれバ。思ひのまゝに翫弄し
ける。時に國王ハ雜劇を見て大に樂を極める
折。たちまち彼樂器の音を聞て大に驚き。
何者なれば我王器を猥りに觸るやとて急に人
をはしらして是を捕へしむ。官人等うけたまわり
後堂に亂入。我儘に彼童を捕へんとせし童子が手を

騒ぎぞ。力を振て友人を拒りれど大勢の友人に云甲斐もなく追立られ。後をみせて逃散りけり。国王其の様を見るに。何れも頭面手足に重傷を帯ざるハなし。国王ハなハち宮中の長官に問て曰彼童ハ何等の者なりして。かゝる勇猛の働をなせしと「マントーリス」長官の名 謹んで彼ハ鍛工長の子なりとぞ答ける。国王廃王に余ぎて鍛工長を召出し。むかふに語られバ。彼小童者ハ微臣が子「左レグワナラ」と申ものなりと言ふ。国王曰我

こふ子細あれバ。汝速に彼小童を連来るべしとありけれバ。鍛工長かしこまりて御前を立帰り。即時に「ワナラ」を召連来る。「ワナラ」ハ如何なる気色もなく国王の御前にまつろくと居り出。恐れ気もなく礼し居たり。その時国王問ていはく彼ハ実に汝が子なりや。鍛工長答ていはく。実に臣が子なりと云ふなり。国王又曰られし。汝いまだ妻を娶らざるに近ごろ一人の妻を召抱へたるなれども。其日数猶僅なり。然るに斯る男子

有て志かるか。かゝる振旦紙かまことこそ然るを
とありければ。鍛工長叩頭して申
けるハ。誠彼小皮者ハ。穢族の子にて眷取て。
臣が子となしたまふなりと。國王曰。志からバ
汝が子。かくのごとく長大にして志かも強
勇なり。今日より我宮中に留て君位に
べしとて。やがて「ワナラ」を堂上に上らせ君
れける。鍛工も内心ハ憂を抱といへども外
ふハ歓喜の色を顕し。恩を謝して退
出ぬ。此段所謂あるべし前編を閲せざれば洋なるべし　夫より「ワナラ」國

王に近侍せられ僅に一二月。其頃近隣
の國に合戦ありけるが。やがて此爪哇國をも
襲ひきたりければ。国王「ワナラ」を軍将とし
て。戦場に向ハしむ。「ワナラ」戦へバ必ず勝。攻
れバ必抜て。敵兵を追払ふのみならず。許多
の州縣を攻取。数多の財宝を分捕して凱
陣しければ。國王大に悦び。是よりして彼
を寵する事日々に十倍せり。遂に「ワナ
ラ」に附けて万人を統る長として。「パテ
イヤタラ」都の名の内「パワセル」地名の北の側に居

任せしむ。其權勢。此國の執政「アリヤバヒ
ヤヒ」人名なるおとしざりけり此「アリヤバヒ
ヤクライツテヒ」なる者ハ。瓜哇国の諸臣多き
中にも取わけ貴重せられて子細ハ元来
國王の子にて。廢王の列なれども。今群臣
の長として執政第一の人なりけり。志かる
に「パヽヤクヒ」久しく封じて靜まりて都に還返
し。國中の政令をとられ。或日國王の御前
に出。願くハ國中の鍛工をことごとく我
宅に呼集め一ツの軍器を製せんと欲すと

請ふ。父の國王許容ありければ。「パヽヤクヒ」もかね
て國中の鍛工を呼集めしに。あつまらず
して一の鉄室を造らしむ。志かも一日の内に
功を竣んことを要む。是何なる軍器をバ制
せざりして。此室成就るときハ。「バンヤクヒ」久
しく不臣の心を懐き。父國王を弑して。
おのれ「パテイヤミラヒ」の國王たらんと欲せる
きざしあり。故に機密の謀を設けてこの
室を營むなり。そし昨日成歴で。おのづ
から外人の漏泄んことを恐れて。一日の中

再ハ成就せしむるぞ有ける。既に其室成けれバ。「バこヤク」種々の珍宝を排列し。牀帳枕机の類。金銀珠玉を以て飾り立。その上名香数品を具して。一室に薫じ満しけれバ。一たび此室に入るものハ。恰天堂に坐するおもひをなせりける。「バこヤク」ハ信ふ終り終り。國王を我宅に招待せんとするを請ふ。王即時に駕を促して彼宅に至ませバ。「バこヤク」膝行拝首して出迎ひ。大に宴を排て山海の珍味を盡しけるにぞ。王を

はじめ陪従の諸臣。各歓笑して醉を極め時。國王偶庭上の新室を見て「バこヤク」に問て曰。彼室ハ何の故に造りしやと。「バこヤク」答て曰。彼室ハ陛下の寝室に造りしものにて。暑き時彼室に入バ忽ち涼き気を生じ。寒きときハ忽暖に。痛るときハ忽愈。飢るときハ忽飽と。王驚ていふく云所の如きハ甚奇なり。我暫く入て試んとて。即彼室に入られバ。「バこヤク」計ごとの成ことを大に悦び。手早に彼室の戸を閉し。鉄室の四面に薪

を積事山のごとくなして。一同に火をかけれ
ば。烽煙天を覆ふて燃上る。陪従の諸臣大に
驚といへども。悪く「バンヤク」が猛威を恐て。
誰有く火中に跑入り。王を救ふもの一人も
無りける。良ありて國王燔肉のごとくに燒
死しけるを引出させ。「バンヤク」声を励まし
していひて曰。凡人たる者。いさゝかの債と
いへども。借りたるものは必ず返さずといふ事
なし。我幼き時。父國王の為に「カラバング」
河の名の水中に投入られたり。此事前編に出たるべし詳なりしぞ

今その債を償ふなりとて。遂に其屍を。「カラ
バング」に投入しむ。陪従の臣下おのゝく中に。「ジニ
ガンダガ」といへる者。此席を忍び出。太子「スーストー
ルーグ」の宮に来り。大に號泣して事の趣を
告。太子大に驚嘆し。たちどころに宮中の
所の兵士を催して。「バンヤク」が宅へ馳向ふに。
さしも國中の者ども悪く「バンヤク」が威權に靡
き従ひけれど。太子の兵卒戦ふ毎に敗北し。
四五日が程の戦ひに。近臣のこらず討死し。
太子一人となりたりける。今はとや孤従なく

此に東方に道をとれバ。纔かに只一人千磨
百難を凌ぎて。やうやく「カリグレテイ・グ」と
いへる縣にこそハ逃走りけり。爰に一人の老
婆あり。名をば「ヨヤイランダカリグンテイング」と
いふ。素これ國王の妾にして。太子「ストー
ルーグ」を産せる後人に嫁し。此所に住居を
なせり。太子先此老婆が家に到り。始終
の旨を述め。將に復讐の事を謀るのみ。肝
膽をこそ碎きけり。抑も「アリヤバレヤク」ハ父
國王を弑して後。「パテイヤミラビ」に居住し
て自ら亂哇國王と稱しけるに。人敢て反く者な
し。此時まで從ふ今ハ下し。然れども有れ。太
子「ストールーグ」を偶宿せしや。あるひハ嫡
を以て扶助し。合力をもなさしめ。或ハ罪を九
族に加ふべしとて太子を探し求むる事甚
嚴密なり。「ニヤイランダカリグンテイング」或日用
事ありて「パテイヤミラビ」の都に出しが。此制
札を見て一驚を吃し。慌ふためき家に歸り。太
子に告げしくの由を語り。且三人の兄弟「キヤ
イウイラサリイ」「キヤイバアデル」「キヤイタムビ」

等と高慢して。太子は逃れ去んとするを
嘲るに。「ストールビ」人之に向ひて曰今我
たとひ鉄骨銅皮ありとも一掬の金吏は以て
「アリヤバニヤク」が大軍に敵せんとするはおもひよらず
ぞ。我は避て他邦に赴き。時の至るを俟べ
しとて即時に此地を去んとす。四人の者
頗に別を惜みて。暫く太子を棄るに忍
びず。彼是百人ばかりの人を従へて太子に
附添ひ。何處を當ともなく。そこそこ
とそこそこ落行けるが。かくて数日を歴経に。幸

ひして「クームバング」といへる山の麓に着けり。
人々此山に登んとするに。路甚だ嶮岨
なれバ木の根にすがり岩頭に縋りて漸に
攀躋する所に。たちまち一陣の大風起り雨
八盆を覆すがごとく。木を抜石を飛し。電
光霹靂おびたゞしく。山嶽も砕飛天も破
るゝばかり。是何の故なれバ。此山上に一
人の妖婦あり。名を「ミヤイテヤンマラトウンガル」と
いふ。天下の妖怪悪鬼の類を統従へて此山中に
隠れ住む事年久し。今此風雨雷電ハ衆の

妖怪等。「スースルーゲ」以下の人々。此山に入るものは彼妖婦に告知せんとて呼喚ける声ありて。人を肝落魂飛て恍然たる甚だし。何処ともなく一ッ声の振鈴の声響くとおぼしく。忽雷霆快晴せり。丈なり人を索め励まして。山の頂に到りて見れば。「テヤンマミヒ」の大木。木名形状未詳森々として生繁り不意に風や。甚樹の茂より発陰の声を発す。一羽の大なる鳥に怪みけり。太子おもへらく不影とあり。此山中に「ミヤイテヤンマミフトウンガル」と

いふ仙女あるものなり。此末にして甚仙女の隠れたる所ならんと自言自語る所に。思ひよらざる彼木より大光明を放て銀の釣線を現し。垂るゝと白髪の偶女顕れ出たり。太子おそれを地上に跪て曰。大仙は「スースルーゲ」逆臣の為に国を逐れ。寄るべ無く六教を無し。仙女曰。苦哉汝が来れるなり。去ながら今汝が兄弟「アリヤバンヤ」二人一味の勢に乗して威権甚猛なり。更に汝が帝たるべき事はあらじ。我も亦汝が故ふるを

得ざれども後来の苦労を示すべ
し。前ミ来れ詳に是を得ん。汝今此山
を去り。猶も路を東に取りて旅行せよ。行く事
数日にして一株の「ポーンマテイ」といふ名なる
木を見るなるあらん。（木の名形状未詳）其実を今より
味ひに苦かるべし。甚樹ある所に都を
建べし。百神擁護の地なれバ。父國王の讐
を報ざるのみならず。子々孫々に至るまで永久
に爪哇國の王位を保つべし。猶且さまなれ
ば前過のなきを得るやせん。我ハ元来汝が

大叔母にして。汝が曾祖父「ムーデイングサリ」
の女なり。我若かりし時。爪哇國中の諸侯容
貌の美麗なるを聞。各あらそひて娶ら
んと欲し。妻問するもの数多ありしか。密に
に一人の才子と相約をなし。其者に依りて
敢て衆人の妻問をうけいれざりしかバ
衆諸侯怒を動し。遂に干戈におよびし
が。合戦利なくして。双親難に逢たまへ
り。我ハ其時より此山に身を隠し。年を
積月を累て。今ハぞかゝる世外の者となれ

ありと語りをはるがまゝく。たちまち丈なる鬢離なる
老女の形は変じて婥約たる美婦人となり
まり。其容貌実に絶代無双にして嬌氣
人に迫まり太子其ハ精神恍惚として正
氣なく。都て前後のことは辨せず一意に甚
美貌にたぶらかされて抱擁し。手は取りて
獻ずるに。忽然として又こしめの形となれ
り。太子心始めて着悟し大に愧大に慙地に
伏して罪は謝す。仙女曰。あえて恐るゝなかれ
是よりより此方ハ反りて道に棲人なれば或ハ

老たる姿は現じ。またハ稚き者とも変じ男
となり女となるの。秘術のよくするにして。長ふ
死せざるのなし。変化不測の術はよくす。秘
ハ是より南海「ブランデビ」といへる山の南「マフ
タビ」ふ都は築きて万國世界にあらゆる所の
妖怪悪鬼の首領となりしん。大事を決し。
大軍は出さん時。汝必ず秘名は呼びて。暗に
なりて守護ながらべし。とく此地を発足
せよと。また秘教諭せるの掌に抱かれし。
「スースルーグビ」をとりしめとして一行の衆人。

ごとく拝伏し即チ仙女の命にしたがひ。東の方に路をわけしが。仙女の教をしたひ進み。足拔をわたり行に「スースールービ」疲難て一株の木下に憩息ひけるが。地上に二三箇の菓実あり。是を見るに甚熟しければ採て食へば甚味ひ至て苦し。然るに於て彼仙女の言を思ひ合せ。叔父「ウイラサリイ」に問けるは。是ハ何の菓なるぞ。此地ハ誰が領地ぞやと云に「ウイラサリイ」答て曰。此菓ハ「マデイヤビ」と云てはしまる。此地ハ「アステイサビ」と云て。則「ハデ

イヤタラヒ」の屬縣にして汝が領ずべき所なれども「アリヤバビヤビ」「ハデイヤタラビ」を押領してより此處も彼賊臣の領地となりきと。「スースールービ」此言を聞て天に歓び地に喜びていはく。幸なるかな。是まかりて太叔母の教に不よして我王業を興すべき地なり。遠に都を建べしとてやがて地名を「マデイヤパイ」と改め。遂に此所に都城を築き。近辺の人民を募集むるに。前國王の旧恩を荷ふ者た。我もくと

馳集る程に幾ばくもなくして数千の
軍兵ぞ打ならびけり。いでや此勢に乗じ
て。逆臣等を一戦に打込し。父國王の
妄執を晴さんと。合戦の評儀まち〳〵
なり。去程に「エングワナラビ」ハ。「アリヤバビ
ヤクビ」國王を弑しける折からハ。已が領内
「ハツセビ」の地に住て道路はるかに隔ありけ
る故。此大変を聞も知ざりしが其後
追々「アリヤバビヤクビ」が逆意の次第太子
も行方知ずなりしを聞甚怒り骨髄に徹て。

今ハさや「ワナラビ」が頼むべき君も太子もま
しまさず。此上ハ「パデイヤヽラビ」の都へ攻入
逆臣「バビヤクビ」をはじめ彼に従ふ奴原迄一々に
討亡ぼし。忽に曠野となして今の無念
を散ずべしと。たゞちに手下の軍兵を引
卒し。不日に都へ攻上り。寝食を忘れ
息をも継ず日々夜々に血戦して。屢勝
利を得ると云ども。寡ハ衆に敵しがた
く。大國の軍兵なれバ。切ても突てもさ
るゝことなく中々一時にハ取挫きがたく。程々

肺肝を摧きしが。此頃太子「スースール
ーグ」「マデイヤパイヒ」に都を建。旧好の
主が招しとゞより。取物もとりあへずて。
昂晴に馳参じ。「スースルーグ」に謁見
しければ。太子一ト度ハ悲み。一度ハ悦び。
まづうち「ワナラヒ」に三千の兵を賜ひて
「バデイヤセラヒ」に進発せしむ。「バニヤクヒ」
此由が中より。逞兵をえらぐりて遣し
戦ふ。合戦数廻ずして義兵遂に勝
利を得。敵兵が鏖ニし。大将「バニヤクヒ」

を擒とし一刀のもとに命が取りけり。此に於
て。「スースルービ」他日の蟄懐一時に啓け。父
國王の神霊が慰さむるが得たり。志しよ
して後其身ハ猶も「マデイヤパイヒ」に都城
を定めて。瓜哇國王と称せられ。「バデイヤセラ
ヒ」が。末弟「パヒゲランアリヤバヌーラヒ」にあた
へて是を治めしむ。三人の叔父が執政と
し。「ワナラヒ」に授るに大夫を以テし。其外の
官職盡く備りて。瓜哇國全く平均し。
新國王の徳化に靡き従ひける。其後年

歷世て「ストールーグビ」病に係りて神去りれバ。其子「パラフーアノムロワリングパスサビ」是に嗣で爪哇國王と称せられけると語り傳へし。

此一條ハ「バターヒヤス矢ノードシカップビ」といふ書中（爪哇要録と云義なり）に出と云へる條は亭が彼良沢前野達う「ヤワーンセヒストリ」と譯しけり。「ヤワーンセヒストリー」ハ爪哇紀傳といふ義なり。其總目は閲するに。第三條と有て其一二の條は脱せり。彼に起ちの来歷は詳にせずといへども語りき。

○竹鎗會　爪哇

方輿勝覧ぶいはく外國竹枝詞の註に於國十月を春首となす。竹鎗の會といふ事有り。丈夫塔車に在して會所に至り丈八偶をえりて各竹鎗は執妻ハ各二人をその末棍を執て其中に立ち。鼓を鳴らは號とし。鋒は交るに三合。其時二人の妻。彼末棍をもりてこれを撃て。那

刺那刺といふ昴ものまじめて退散
させ若突毅なりし者ある時ハ國王より
務むる者に命じて金銭一箇づつ死者の
家にあたへしむ。死したる者の妻ハ務
むる者に随て去ことなり。国王も妃とい
ふとも車に乗て會所に出るとぞ。

○聖水 同上

此國の海灘に小き池有り。聖水と名づく。元
の将。高興史弼。此國を征する時。水に乏
しきを天に祈して禱祝し。鎗を

地上に突立ければ。泉湧て涌出せしとぞ。
我朝壺井の清水と同日の談なり。

○巴旦人日本へ漂着の始末

巴旦ハ大寛の南にあり天竺につづき島
なり。延宝八年五月十七日の夜。日向此國へ
十八人乗の異國船漂ひ着なり。夫より
翌月十八日。領主伊藤出雲守殿より長崎
へ送らる。紅鎮臺牛込忠左衛門殿のとき
らひあて十善寺御薬園の門。唐造の船
具取入置し。武間粟に六ヶ月此小家のうちへ

彼漂客は長崎に至り。揚屋に紅毛の通事を
もして。彼の申す言を人に令せられて。同
せられども。些も言語通ぜざる故。何国の
人とも知ざりしに。御薬園苗手入役水野
小右衛門といふもの。少し覚ある男にて。手よ
盥に水を湛へ。小石を以て嶋組をおし。笹の
葉の舟に土偶人を乗せ。水は海に[illegible]
む。漂客ども合点して。指て嶋組を解き語
けるに。まさしく方位を正し。日月星辰の
形を作りて昼夜を分ち。船路を[illegible]

らるゝ。異国人つぶさに仕方をしけるが遂
一地図に燭して見て。巴旦人なることを発明
し。結臺へ訴へ告しければ。牛込氏大に
感心ありて。小右衛門を巴旦人通事になら
せけり。漂流の巴旦人。姓名左のごとし。

ヌマチイ　二十五六歳程
スイモンクイナムアツク　三十一二歳程　病死
スイモンヒマツトバク　三十四五歳程　同断
シタヨムナツク　二十歳程
マトツポ　五十七八歳程　病死

スイモンカラム　二十二三歳程　病死
スイホウ　五十七八歳程　同断
シヤウロタツコ　十五六歳程　同断
子ヤス　二十四五歳程　同断
スイモントツク　三十二三歳程
ケムライナツク　三十二三歳程　病死
ラツクウ　四十四五歳程　同断
スイモンカツカウ　三十七八歳程
ヒハクランナツク　四十四五歳程　病死
スイモンアツ　三十一二歳程　同断

セイダイアツク　二十二三歳程
スイモンムスリ　二十二三歳程
スイモンカラムナツク　三十二三歳程　病死

右十八人の内色黄なる有。黒きあり。小児(ふくろ)なれども。剃髪(ていはつ)してきしたるよし。長崎にて剃(てい)せられしもあり。背の高サ五尺五六寸。衣服ハ日本の風呂敷のごとし（中良案ずるに是ハ天竺あそ留さらる用ひとべし）以後ある冷気の砌よりハ。木綿布子ばあてへられしまで。残らず縫ひ抜きて。袖無の襯衣(はだぎ)に制して着せしとなり。褌八幅七寸斗の

巴旦人之圖

耳に附る札は立山の廳へ
えしめて呼出さるゝ時
切戸口を
入時一を

十八までの数字は
書たるを耳輪へ附
させ何番の巴旦人
と呼て是を弁ぜ
られしとなん

是も耳珠に鐶は
つくる完あり
しとなり

木綿にて。織器にまじひ糸にて種〻の模紋
あり。唐山製の刀紙佩。煙草煙管ハ日本語
に同し。文字有り。横に書を。中良案に天竺にて用ゆるコレイ又文字なるべし
持渡ある蜀黍の種紙六月蒔。九月に至
生ぶれて喰ふ。飯ハ焚法日本とかはる事
なし。但し土鍋にて炊なり。結髪の命
わようて死しける者をあはれめどもあり
焼にして小刀にて切り。水煮にして食ひ
又菓子などある事まで人数に切り配じ
て食ふ。或時ハ大木の枝へ。細縄にて罟を張る。

煮えて毛を引。又煮にして食ともに。木
に登りてハ猿のごとく。海に入てハ鶴のごとし。
霞ヶ防ハ。長サ二尺五六寸。横を尺ぐらいなる
刳物の箱を壁に立置。紙をはさみて贈る。
毎日紙浴。九月の比ハいかりて宣に湯
紙用ざりしと死。巴旦人ども追〻病死
し。○何れも崇福寺へ葬り。残り六人になりければ。結
羞紅毛人を召出し。此者共本國へ送て
来るべし迚。お渡さる。蛮人畏りてる由
にて同年九月出船の節同船して出帆

しけるが。巴旦人とも本國へハ帰らずして。咬𠺕吧にて（ジヤガタラハ爪哇の都なり）妻を娶し。一人ハ泥水匠となり。孫アるハ治者の加工となりけるよし。翌年の加比丹言上せしとぞ。巴旦人の乗りし船ハ。代銀百目にて拂となる。長サ六間横ハ丈五寸。底にてかゞげ。鉄釘ハ用ず小舟なり。檣長サ壱丈八尺三寸余ありしとなり。此事西川氏の長崎夜話。及び華夷通商考ニ委し記したれバ以下略ス。又此大槻玄澤子より右の回記寄らる

かいきしる甚漏なるを説。詳説ハ亭が手輯する所の。海外異聞中に収めたり。

○老者を殺す　巴旦

巴旦にてハ。年老たるものハ。働悪しく役に立ざるとて。親といへども打殺して仕舞ふなり。家道儀隆芋魁を多く貯ハへたる家にてハ。老たる情なるまいぜ。老者を養ふこのも有となり。此國五穀ハ絶てなく。ただ芋をかけて糧とするなり。素より仏神をしらず知らねバ。一村婚葬祭の礼もなく。人死

されバ畑のかこひへ埋みをき。其跡を踏平し置となん。

右の話ハ。寛文八年尾州智多郡大野村なり。孫太夫門といふ者の船巴旦に漂着し。種々の艱難に逢けるが幸うして彼嶋を遁れ出。南京人に扶助せられて日本へ帰りける水主どもの説なり。其記録ハ海外異聞中に載けり。

○甲冑 同上

彼水主どもも巴丹に滞留の間。彼國中「マナ二ヨイ」といふ所と「ウサ」といふ所と仇を結びて軍を起しける。鎧ハ牛皮にて作り冑ハ木を刳て鉢子のごとく製し其上を紙包にしとぞ。

○家作 同上

家ハ大抵九尺へ梁に二間ほどなり。軒の高さハ三尺へ程に作り。四邊にならひて出入る。是海風劇きによりてなり。客来るとも内

へハ入れど。各門口に居石あり。其石へ纓珞を
かけ。扨しばらく小數待ともん。總て家作
に釘を用ひず。樹の皮にて括り立屋上ハ
何れも茅茨なり。根太ハ木にてなしくてる
俗ありく雜物もなし。全體熱国なれ。
極月の中も日本の三月比の氣候に同じ。
さるによりて。國人多くハ裸なりとぞ。

萬國新話巻之四　亜細亜海嶌之部

東都　森嶌中良　編輯

○象人語を解す　錫蘭

錫蘭嶌ハ象多し。他の象と異なりて
能く人の語を解す。土人物を負せて某地
に至れど命ずれバ。かならずぞ爽へぞし
て其所に送りとどけん。他国の象これに
遇へバ。をるひ地に蹲り伏となり。

○桂枝 同上

此嶋の山林におほく肉桂あり。土人刀にてほりて樹に畫を入、外皮を剥去り、第二皮をゑりて日に晒せば、其生なる時は黄白色なり。乾くに随ひて両端を内に巻縮。その色変して黄赭色となる。是を薬用の桂枝なり。其樹三年を歴ば皮再生すること枝のごとし。

○涅釈迦 同上

明史外夷傳に云。錫蘭國の海邊の山上に石

あり。石上に一の足跡あり。長三尺ばかり。是紅毛雑話中天竺鷲山の條に誌せる佛足石此なり より来りて。故老いはく。佛翠藍嶼 同書中に爪哇東南海中三四の山あり總名を翠藍嶼といふとあり中良案るに錫蘭翠藍音同し別所にあらざるなり 此に跣かゞ跡尚存せりといふ。浅水ありて四時ともに乾かず。人皆目を拭ひ面を洗ひ。佛の清浄といふ。其山下に佛寺あり。釋迦如来の真身の牀上に側臥をかくいふに仏牙および舎利有。相傳ふ佛涅槃の處なりと。其寝座は沈香をもて是を作り、諸の寶石をもて荘厳すと記せり。

中良案 又竹枝詞

の注に永楽中鄭和ことありを率して金銀宝幡を布施となしたるよし書せり

○人の血を浴る　蘇門荅剌

嶌夷志に曰。蘇門荅剌の酋長。毎年十餘人の人を殺し。其血をとりこれを浴て別に四時疾疹を生ぜざるとなり。中民案に古城王の人膽酒に似たるものなり

○犀象を闘ふ

「ヨハンブラア」が萬國畾説に曰。此國は象多くしてめて大なり。能く人に馴。戦闘に陣す。象は用ひ又犀は産せず性としてふ象を憎む。小なりと雖まさに能象と闘ふ。

其時に闘はんとする時は石上にて角を磨。象は腹を突破て殺すといふ。犀は大さ象に亜で其なりと形状主治は伯氏著す所の和蘭薬選にみえたり。

○鷹王　呂宋

呂宋は此地に鷹を産す。天正の初泉州堺の商人納屋助左衛門なる者小琉球より呂地に到り文禄三年彼地の産物を携へ帰り秀吉公へ献ず　内に鷹王あり飛時は其外衆鷹これに従ふ。或は禽獸を得れば。鷹王まづこれが睛を一度啄て然して後。群鷹其の肉を喰ふ

となへし。　別人の説

○地ハ伊西把尼亞に奪はる　同上

往昔伊西把尼亞國の人（伊西把尼亞ハ歐羅巴中の一大國なり華人の説ハ拂郎機人呂宋を奪へりと もろこしの誤なり）呂宋に來りて互市をす。或時黄金おほく其王に奉りて乞て曰。願くハ牛の皮れ屋を蓋ふべけれど地を得ハ人と王ゆるしけれ。伊西巴尼亞人すなはち牛の皮を數多續きて數間の土地を皮にて囲ひ。是に称ふべけの地なりとひけるぞ。呂宋王計を知りんどといへども信を重ぜ

吏に失はんとすも黙止がたければ其備に地を與ふ。伊西把尼亞やがて其地に城郭を築き室を營み銃を列ね刀楯を置て要害を堅固にす。其後遂に呂宋を圍て王を殺し。此國を盡く伊西把尼亞の有となせなしける。今もなほ伊西把尼亞の呂宋なり。曾呂利が太閤秀吉に紙袋一盃米献ぜしもこれらと同日の談なり。

○男色を禁ず　同上

東西洋考に曰。呂宋國狡童を禁ずること嚴なり。

此地に来る華人犯すものあれバ天に逆ふ罪人なりとて薪を積て焚殺すとなり。中良案るに男色を禁ずるの法紅毛とおなじ 是同じく欧羅巴中ハ伊西把尼亜より酋長を出して西洋の法紙用ゆるなり

○丁子 蘭 沙谷米(さごべい) 馬路古

家兄の譯説に曰馬路古の諸嶋ハ赤道の下にあり。其北なる小嶋より多く丁子を産す「テルナーテ」「チドレ」「モチル」「マシアン」「バシアン」の五嶋殊に多しとなす。其樹月桂に似て葉やゝ長く細く柳の

葉の似し。其花もし色ハ白く後緑に変じ萎て墮ぞ。色赤く堅まり遂に変して実となる。其形状釘のごとし。故に名て丁子といふ。紅毛もそ「ナーゲル」といふ「ナーゲル」ハ釘の変名なり丁子ハ漢人の義譯なり 花ハ緑色なる時。芬芳諸花の及ぶ所にあらず。其實ハ枝の先に攅簇す。此地諸国へ交易す畜獣なし。只野羊と鶏とのミあり。故に給糧に乏しく。土人樹皮紙を磨て粉となし。餅に造りて食とす。其樹を「サアゴウボーム」といふ。彼餅に製したるものハ。

所謂沙谷米なり。

○食火鶏　番達

番達ハ南方の小嶌なり。此嶋に異鳥あり。産す。其名を「エメウ」といふ。大さ鵝のごとく。舌なく翼なし。羽毛黒く頂の上に冠あり。其質鼈殻のごとし。爪ハ甚長きごとく物に觸れば後さまに蹴る事馬の蹴るがごとし。燒炭礫或ハ鉄といへども拔ぬき事迄も則ち食ふ。是「エメウ」なることの量。いはゆる食火鶏なり。俗人是をもれて食火雞を駝鳥と思ひちがへて覚えゐるものあり。此鳥

安永年間紅毛人（加比丹ハコスチンゼ「ロンベルゲ」の内と覚えぬ忘れたり）これを携へ来りて公へ進献志けるに。後園にて飼せられけるが。幾程もなく死しけるとぞなり。客歳蹊壽館にて薬品會の時。医官田村氏。此鳥の死したるを。公より給はりけるとて其席へ出されぬ。

○唐泊浦孫七勃泥へ漂着の話

筑前の國志摩郡唐泊浦の伊勢丸といふ船の水主船頭ともに二十人。宝暦十二年十月。奥州南部の境なる。尻屋の岬の海上にて

難風にあひ。天竺に属嶋。渤泥へ漂流し。同國中。「カラガミ」「ソウロク」文郎馬神などいへる地を遍歴せる内。同船の者ハ残らず死亡し。只一人活のこりたり。明和七年六月十六日。渤泥ハ近国。爪哇國の都城。「ハタービヤ」より発船せし紅毛船にて日本へ送られ帰国し。孫七なるもの。渤泥にありける間の物語を審に筆記したる。七天竺活と標題せる書。一巻ありしを書中より抜萃せる奇談。

なるを此次に紀すなり。全編ハ海外異聞に収録せり。

○異菓 渤泥

孫七はじめ渤泥へ漂着せし時。陸に上りて山林をめぐれども栗のごとき菓枝も撓に生りたるを。何れも飢渇のあまりに手々にとりて食したるに。甚味ひ甘酸し。されど食して頻に肚腸胃完痛あるもあり。或は酒に酔るがごとく目眩して卒倒するものもあれど。死に至るほどの事もなかりし。良久しくして

してこれに優しければ。然しハ猨に
精も附。然程餌をも助ける。後日其
土人に語けれど。此実を搗碎く大河の
渕へ沈むれば。水底の魚ことごとく噴喝浮ぶ
時。網を入て是を採る。大に毒ある草の
實と語りしとなん。

○日本人を見世物にせし　同上

渤泥國中「カラガ三」といへる城下に。吟ひ
居ける内。其の湊に和船来りし漂人
小乗船を以しといふ。皆く抜きまゐて送

里帰をと。心嬉しく家路を急ぐバ。船は八三ッ
の帆を引揚。同国中「ソウロク」の城下に
着岸し。同船の者城引分て尽く所に
へ賣渡し。幸五郎といへる船主と孫七
などは「ソウロク」の地へ賣渡しぬ。二人ハい
うちある髪文同如てあるといふし鬱悒思ひ居
けるに。夷ども来りて。延たる月代を剃せ
日本風に髪結せ羅紗和羽織着せ。
戯臺を拵へたる所へ帯行ぬ。二人ハ一向に
合点行ねど。夷どもの云るまゝになりて

居ま之八。扨く小れ太鼓を持せ。銅鑼太鼓
噴吶を持せる烏鬼ども後ろに列なし。揃
子可笑しやし立る体。いかさま和く紙
見せ物ふある事よしと会得せる。見
物の男女山のごとく集ひ。寝しじめ名と
いふ目かや。口々に喊起りけるに外番
の夷。何なりとも日本の紙唱ひて踊ま
といふ。否といへど余紙や失いれん。どら
んと口惜しみ。旋没なし。池の泥亀
たぷんぷ。五郎なげ節泥亀の子と。是ハ西国の小新なり

取洩拍子ふ蹉里了まバ。今までの看人を新
入れ看亢人と入替るさま。何ぞもかりしぬ
形勢なり。夫より此支人紙駕籠ふ乗せ。
所々方々紙見世ものふ連歩りね。至る所
食物よ紙を附。火酒紙飲せなどして廉
畧ふハせざりけり。

○火酒　同上

此地の火酒ハ。飯を炊く甑ふ入紫糖れ水
ふ浸し置き。泡立て涌上るなり。夫より
泡消く後。釜ふ入甑をとりて蒸しをとりと

なり

○イリンカツトの人物　同上

男子ハ身の長六尺ばかり耳もく垂。耳朶に真鍮の環を入たり。髪ハ赤く縮れ。眼の毛迄白し。皆丸裸にて褌ばかり上に いさゝか物を纏へり。女ハ耳環をつなぎて瑶珞の如く下ヶ。男子ハ羅紗衣を穿て臂より先を掬し袂露はし。螺髪を堆髪なし。生死をともに昇とするなり。

渤泥國の人ハ何方も大抵同じ風俗のおもむきなり

○死人の首継替　同上

「イリンカツト」の地にてハ親死すれバ首を切て残し置。外人ハ此首を切て死骸に接。厚く是継葬るなり。志うされバ大す宗をおもるなり。男子ハ女の首。女ニハ男の首継接となさん。富有者ハ邊く売人を買置く接首に備となし。貧困にして売人継買事能ざる者ハ死罪の科人を乞てその首を接ぐ又ハ他の地へ出て椎埋し。其首継あまりて葬礼に

供さるとなり。

○文郎馬神の風土　同上

文郎馬神ハ。渤泥國中の都會なり。南京。福州。山東山西の華人借地して舗を并べ家作ハ何れも尾蓋なり。市街ハ板にて張り。往来の人は紙踏で華紅蛮舶輻湊して甚繁昌の地なり。孫七ハ此町内の綵帛舗へ金銭三十文にて買ひ遣。此金銭ハ一文を銀十匁目ほどにあたり紅毛の金銀銭は通用する事なり紗綾綢縐しの下男となり。名を日本と呼れける。主人

ハ華人にて名をタイコンと云ひ。妻をハキレトンと云ふ。伴當手代も華人なり。下男ハ烏鬼下女も崑崙奴の娘なり。上下二十人餘のくらしなり。されバにて此豪家なり。主人夫婦老母とも結構人にて家内の召仕女にまで行義つよく男女席を同じうして食せず。飯ハ下男ハ下飯ハ下女に調理さしむ。此王都ハ暖気にして琉瓏五六月ハ氣候のぬくさ故。四時ともに草木ハ花咲満て絶る事なし。たまたま葉衣みな淺

うらなり。さるかそりに蛍蚊多し。光と
なく譏となく。常に蚊帳をたてゝ寝る。

○言語 同上

文郎馬神にては。是ハ何ぞといふ事を「コヽ
サミヤア」ぞとあるかくするといふ事を
「テウサミヤア」といふ。数ハ「シヤトウ」一「チカ」二
「アヽハウ」三○四の蛮語を脱せり「トヽ」五「アンノヽ」六「トンエ」又「ヤ
ウトウ」七「ハロウ」又「ダラスヘ」八「サンヤア」又「サヽヒ」イ
ラヽ」九「サウボロ」十本書に此外の語は紀さず。

○商人 同上

街路を行に坊賣。声は立ずして喊るのみなし。
阿刺吉賣ハ噴吶を吹。貨郎ハ竹彫ば搖り賣
油郎ハ鐸を振。醤油賣も同じ 賣肉翁ハ小太鼓ば
す。何れも擔夫に肩しめて賣あるく
ことなり。

○婚娶 同上

孫七が主人の才カンベレ官に作伐をする人有
て。結親とのひ。良日を揀て婚礼あり
中良素に此婦ハ其地に住居せる華人の娘なるべし我国の人此国の
女と契をなす時ハ男の装ば剃髪を以く妻合すと此書に記さず
新郎の方より新婦の方へ聘礼の品

を送る。其物件は衣服 三襲○何れも筒袖の長き衣にて四ツを送る するなし なり 金もて造りたる戒指 六ツ 手腕に着る 金の耳環 二ツ 金簪 十二本 紅毛金銭 百二十文 履 一足 襪 一足 火酒 一斗入二瓶 蜜蝋五十斤掛の大蝋燭 二挺 猪 牝一疋 牡一疋 鵞 一番 家鴨 一番 右の東西或は箱に入又は臺に載て下人数多に持せ。媒人嬌客をはじめ附添の人々。都て十八人新婦の家へ行て祝儀の詞へ酒牌よ家ふ帰るれば。即刻新人の方より送る物あり。衣裳 一襲 巾着 一ツ 赤き毛氈にて作る笠 一ツ○中に良案に毛華人の家みてる

物なり 枕 六○長壹尺五寸あるものの二ツ是は肱の枕なり 長二尺八寸あるものの二ツ是は手枕なり 長三尺なる物二ツ これは足の枕なり

新郎の方より送れる猪。家鴨。鵞。いづれも雄あるをとめて雌を返し。○此三種はかくのやくれ加へして去家なく 婚礼の祝儀に用ゆ 金銭は二箇留めて大蝋炬も一挺残して一挺は戻しぬ。聟の家にては頓て新人の来りぬるとて彼戻せ来りし巨蝋に火を点し半切桶に米を盛上。其の真中へ押立て門首に出し。ざざめき渡る詩間もなくて彼聘礼に定る大蝋炬に。挑燈二張押双べて先を照させ。新人と同じ年齢の婦人二人。まぶに衣服被きて左右に立ならび。

新婦ハ額ろく額を露し。首飾ハ金の元結。銀
の櫛。十二本の釵をさし。耳朶よ瓔珞をさけ。
手足ニ金の環を入。衣服ハいかにも齊整ニ打扮。
天蓋のあき物をかぶりて後の從者十二人。
燈し来りし蠟燭ハ彼半切へ一本ニ立たる華燭
の席へ通れバ。氏族家族をもじめ。町中の若者
まで毎手赤き蠟燭を燈し肩を挨し足を跋
並ぐへ集ひ。新人ニ對して千歡万喜など演
るなり。是一来よハ媳の容白いかなんが出るあり。
其燭し金蠟炬のちかく席ニ條足の體堂まで

燭しつくるとなり。掛客ハ客堂ニ居流れ
飽食ひ飽飲大吹大擂にて畫しく帰るとぞ
なん。

○丁子 并 椰子油の價 同上

此地丁子胡椒を産す。紅毛人冺手銀にて入をて
それを買ふ。丁子百斤のくく價銀百六十目程乃
つとりなる。○胡椒の直本書に脱せり 椰樹あつかる多し。油
を絞て燈油にして一斤の價八十銭なりとぞ。
中良案るに椰樹ハ天竺地方ニハ何の地にも産
ともかたり。其ハ樹きく多くて良材あり。舟をなし

車に造りて永く破壊せず。其葉ハ屋を蓋ふにもちゆ。まづ編て帆に用ゆべし。其実ハ飢を療ず。其汁ハ渇を止む。又醸して醋と化飴糖と化し。酒に作りてハ上好の火酒となる
中良案るに是カラパア焼酒なるものなり「カラパア」ハ椰子の蛮名なり咲𠮷利製しふるふにあらねども気味ろうげしさ焼酒を長崎にてカラパア焼酒と唱ふるものなり
あるひは金瘡。痔疾に用て効あり。其茎堅くして釘と為べく。殻ハ碗に拵て飲食の器
一我邦にてハ専ら飲に用ゆ。皮ハ縄に索ふ。又錨纜に用ゆ。一木を種て

一家の用を足すとなり。往年崎陽の舌人何某が家の庭中に此実を捨置しが。竟に芽を生せし事有けるとなん。たとへバ此樹吾邦の内暖気なる地方にて種殖ば。生しうるもあるべし。○今来西玉の乏うりなく竜眼肉の生ずるよし紙さく傳ます也。

○年中行事 同上

除夜にハ容堂の天井に印花布の連縫たるを張。壁にも同じ幔を張門外にハ終夜大炮

菴を照し。戸を閉して籠り居たり

扨五更三点より。毎家の主人衣服を改め

親手挑灯を灯し。新年の賀に出門をひらく

なりて閉したる門の外より「サラマツタ」といへバ

内よりも「ホリロウヒ」と応ふ。のまゝにて門へハ

入ずして門首へ名帖を貼して行なり。親属ハ扉

を開きて内に入右の揖拶了て後酒肴を出

して祝ふなり〇是も其地に住居の華人の礼なり土人ハ乃

これハいかなるや　ながきにをけ通したし　田舎

てツ坐「ホリロウヒ」の語華語として

まえんを自然に此地の詞と云訓るにや　正月の餅に白餅黒餅

あり。製法ハ糯米を粉にしてかためき。砂糖水にて

溲交。飩蒸て臼にて搗。切て丸く作るもあり。又

押平めて角に切も有なり。白餅ハ白糖の為。黒

餅ハ黒糖にし水にて溲るなり。年始客の供奉。

さるゝ日数にかぎりなし也なん。三月此節供

ハすゝめるものなし。又月の節句ハ糯米紙にて浸

し。笹の葉に包み。砂糖水にて煮るもあ

り。又蒸も有と云ふ。七月の盂蘭盆會も日本

に替りなき趣なり。又に異なる事なし。

〇燕窩　同上

此地の山洞川に沿たる石窟の内に「カバヤ」と

いふるの窩あり。島ハ燕に似たり。其窩も
なくちらくと異なり他の所なる所あり。
中良案ずるに是燕窩なり紅毛語に「ホーゲルネスチ」といふ食料に
其味ひ美なるゆゑ物なれば甚貴きものなり
紅毛人入银して一斤は银八十目に買ふて
なり。炬を燃して岩窟に入かつくみして
これを獲とらん。蕃主より制禁ありて猥にこれを
とるなるぞ。然るに或年。孫七が主人の隣家へ
異舶來りて件の窩を私賣ける處へ巡邏
防人来かゝりて是を見咎め彼者を捕へ
て厳しく詮議も兎や角と詮じけれど。

所詮遁れがたき形勢なりけれバ。是までと
とおもひ切やがて吏の帯せし釼を抜き。二人が
肚に突通し。白刄を捨て遁出せバ。二人の吏ハ
深手を負ながら一二町が程ハ追をしが息端て
倒伏ぬ。此事おひくせ他く数多の役人巳が
得物を提起く手分して追かけれ。山を指て
く遁登りしが蔦蔓に足をまどひて。遁延がたくや
思ひけん。大木の梢へよぢのぼり隠れたるを。
役人ども目よく見留鳥銃の筒口を揃へて
出されバ。たまりも敢ず遥の谷底へ打落

されバ追人の者ハ手捨にして引返しぬ。帯傷人を見れバ早息ハ絶にけり。扨父ハ手疵されたる星野ハ見ぐるしく疵を手負れながらまでたりけれバ辛き命を助り二三日の後父子ひとつに思ひあひ。何国ともなく逃縣去りけるとぞ。

○褒居者歌舞を　臺湾

往昔臺湾は主もなかれ嶋なりしを。何国のなりや。紅毛人東南の諸國へ行るを出ぬに便よれ地なりとて押領して城郭を構へ嶋の名を「ホルモーセ」と稱しけるが。然るに寛文年間國姓爺厦門より此嶋へ押渡て紅毛人を追払ひてかの者が居城となし地名をも東寧と改めるされバかれら人の知所なり人物風土ハ紅毛雜話中海路乃記の條に記しかれバ略す。され此地なる人死ぬれバ裸體にして床の上に卧させ其傍に火を焚て焙り乾かし甚臭穢鼻を撲て堪がたし上より裹に居夷どもハ死屍を燻かける酒を喫し肉を食ひ。昼夜踊閙ぐとなり。此嶋ハ「ハレンテイレ」に

大寃人殯殮之圖

居喪者歌舞之圖

載たる紙小山氏の摸写せるなり。図にいふ。
国姓爺が子。鄭錦舎。嶌の主たる時。奥州
中村。志和の郡。太那志保といふ地の廻
船大寛へ漂流せしを寛文十三年八月。
日本へ送り帰しけるよりあり。其節船主
呉明なる者の上書。家兄岡野氏より写
し得たる漂民の款状およひ上書の文は。
海外異聞に載たり。

○濱田兄弟智勇の話

濱田兄弟が大寛の酋長を虜し事は。西川氏

既に記し載れど。珍畫を伝る図に。其荒增紙
説。寛永年中。凉陽の郡官末次平蔵なる人。態
帝亜の地方へ貿易の為に。出洋せしむる運漕

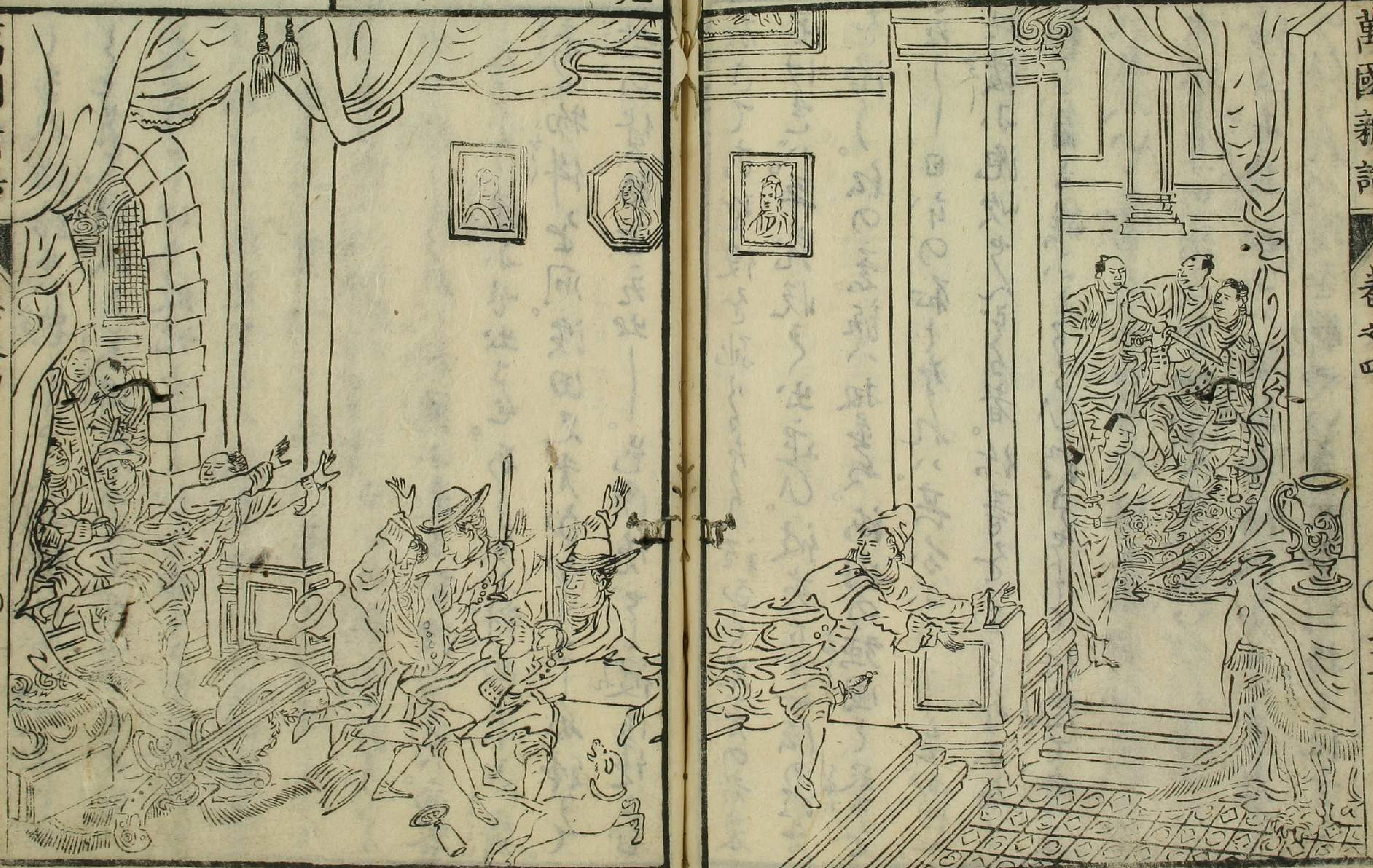
日本より異国へ出しける高船をへ九艘あり長崎にて末次氏二艘舟本氏一艘荒木一艘糸屋一艘泉州堺にて伊予屋船一艘京都にて茶屋一艘角倉一艘伏見屋一艘なり寛永十二年外国渡海停止せられぬ船の形華船に似より通商考にも図を出せり

大寛所管の蛮
舶洋中にて嘲弄のあまり。貨物を奪れんとせる
に至る。船人ども恨憤るといへども。彼は大船にて土つ
と火器兵器を備へたり。此方は唯交易の為なれば
に出したる商船なれば。もとよりしかし兵器もなく
取合手段動かさず事の破談に出ざんと千算万計

て漸く虎口を遁れ。磨羯いふそうりなくして
逐々に長崎へ逃帰り爾々の由を述けれバ。
平蔵忿然として怒悩を沖。にくき夷どもが
振巴るが罷々我未日本の地に指もさゝざるなど。
目にものみせてくれんぞと。即刻管内の町人濱田
弥兵衛なる者をぞ招きける。抑此濱田弥兵衛ハ芳
を新兵といひし商人とも仕質剛強にして頗
智略あり。侠を好みて世に鳴る。平生人と肩を競
汲く臨侠とも。末次氏時常此伯叔を託して
厚く恩を加ふれバ。彼等も主人のごとく伏従せる

あさて志使を馳りたり。福おく兄弟の者来
りけれバ。平蔵呪ろく出迎ひ。彼夷たが無法の次第
を語り。私の意趣ハ抑なり。海内の強國と畏れをと
らし。日本の恥となれハ。其分にさし置がたし。
此報に泡吹せんずる者。你等を置ては外になし
兎も角も能にはからひくれさせよと。任憑て央りれ
バ商人いと易くうけがひ。弥兵衛倅弥左衛門。其外
末次よりの附人を加へて十八人。いづれも商人の
体よ出て扮。私には貨物を積入。不日に支度とく
のひられハ纜を解やいなや。帆を引揚て地方を

瀘田兄弟窘大寛之酋長圖



となれ。海路に熟して奔鯨白馬の洪波をもの
ともせず。追風に真楫をぬきて。日ならずして大寛へ
着岸しけり。彼地なるも名を申さば。番卒出
て船中を點見するに。原来漂ねざる旅商なれば
打捨られば。蛮人どもさすがに苦しがりまじとて
「ゼ子ラル」へ（酋長の蛮語是紅毛より置所なり）日本の高舶ありける
由を啓しければ。利慾に走る本性なれば高客
をも此より速に呼出させ。あらかに對面して齎
来る物件を問。濱田兄弟ありもあらね袖にて
些の貨物をも出し。是満足せよ彼満足さむ

ら〜などと云ひ。ますますしく曲彔の前へ膝をすゝめて
鉄扇を見切て電の閃めく。庇をつく「ゼ子ラル」を
見て押付組着を抜手も見せず。胸先へ指附る。
光と供に影然たる家門抜連て突立ける。是を
見て侍側の蛮人頭を抱へて逃るもあり。級を
抜くもあり。室中鼎の沸がごとく。上を下へと
かへしける。おりに和へし味方の者共。掲音を聞
よりなく日本刀を抜かざし。奥て内へ乱入共
閣噪大かるなれば甚怖れて大音を上。やあれ
実ども爾等みだりに手を動かさば忽「ゼ子ラル」

を一突にすべし。静まつて些細を申せと呼りける故。あさしも獅子の吼るがごとし。蛮人どもも此一言に辟易し。左右なくも寄付ず。右手には八寸の楊を元志ざりけり。左手に一把の汗を握り。固唾を飲で伺ひける。ここに兄弟「ゼ子ラル」を引起し。彼一條を盤問しければ。「ゼ子ラル」慄々然として。いかにも甚法を犯しき。我配下の蛮人なり。方今互市の為に他国へ船を泛て此地に至れば。掠り来る日数持て重れ刑に行ひ。罪を贖ひまするべし。是までの縁に。我一子を差上まるべしと十二歳になりける男子を出し。自今以後其国の船に指さしもいさゝかまじし。海は山に移るとも立かはるまじ。是皆今からく「ゼ子ラル」を申しし人質を引立て本船へ帰し。千里の波路を一走りに。本国へ帰帆しけるく。東沢氏へ面謁し人質の子孫渡しける。其年の内大寛の「ゼ子ラル」彼海賊せんとせし一ッ船の蛮人どもを執へ刑に行ひ。東沢氏まで添へく罪を謝しける故。又もや「ゼ子ラル」に送届もまきてのみならず。又でも八連。翌年人質をを返しける。彼濱田が智勇の程。始皇を刺損

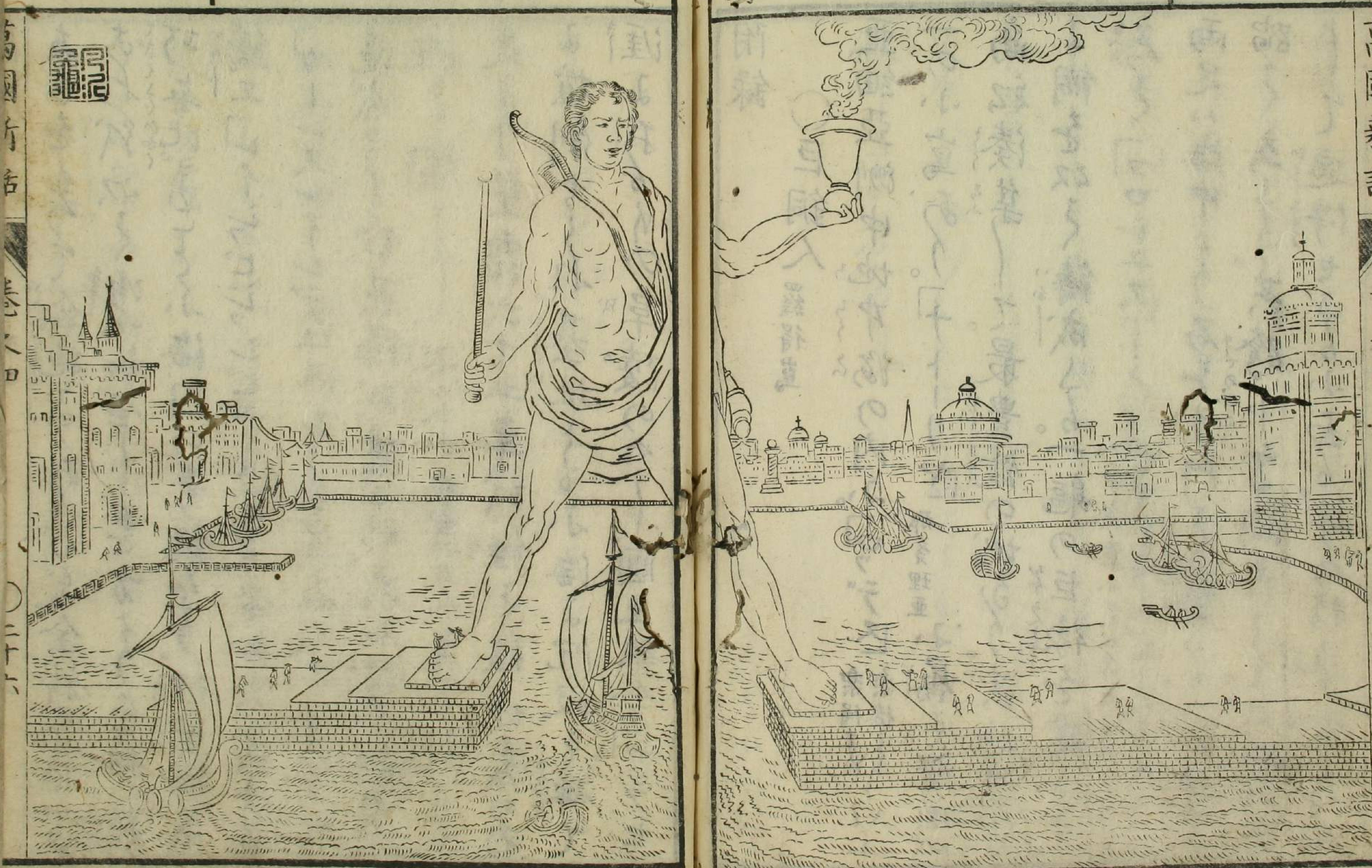
なへる荊軻なくば日をおくらしつゝ海まで
つたぞ。江ふ就ハ世紀早くし。芽新能ハ肥の
みちの後の玉ぞ。何ゆゑ屍の石となりけるらん
此圖ハ「ハレニテイ匕」ふ載たるを北山氏の摸写
られたり文字ハ同書ふ見ゆる異國の果まで
こと。盡ふ寫し筆ふ記しを巻紙のこと。浅田
兄弟ハかへなく日本魂のまゝ乃天工元地ふ
徹りたる者なり。

附録

○巨銅人 羅得島

亜細亜洲中地中海の内ふ「ロッデス」（楽得まる 楽徳とも云）といふ
一の小島あり。「ナトーリヤ」（那多理亜）ふ属せ。諸國の
高舩湊集して最豊饒の地なり。其嶋の港口
に銅を以て鋳成たる一躯の巨像を建たり。
名つけて「コロシユス」といふ。（中良案ふ是世界七奇の一なり又「ロッデスベールド」ともいふ）
両足ハ海中より石をかけて築たる二の臺を
踏て立てり。其跨下を潤ふして巨艘行違
して遍停せざるふ至る。手の指尋常乃人

地中海樂德島港口鉅銅人之圖



安手をもつて合抱するあまりぞ。全躰の高さ
これに以て准へ知べし。其方より見れば精
巧無比。まことに海内の奇觀なり。往昔國君。
鑄工「レイシツピジツシピユール」なる者。および其才子
「カーレスレインデユス」なる者某人に命じて
造成せしむ。其像の建る時。大石數多體内に
納て鎮とし。永久に安置せんことを計れる。
其より星霜六十五年經て後。地震のため
に摧倒せられ。基址ともに海に沈没せり碎て
涯にあるのみのこし。國主縣令「サラセ

ン」と言へる者に命じ。駱駝九百隻を以て破壊
せる巨像を寺觀に運送せしめ各所に是を
修飾せしめしとぞ。明の末西洋より帰化の
人支那に在る時。彼海に於て過て親く銅人を
見たることあり。右手に燭を持て夜は是を以て
海舶を照し。膝を張して港涯を通るに便
ならしむ。其火を點さんとする時は足の内に
旋梯あり。層を經て登る。八號内をめ
ぐりて掌上に出。燈に火を點すとなり。此銅
人の發挙より曰く。人丈千餘人およそ十

枩本藏書

二年ふして落成といふ。此圖此説ともふ
小山汎泥亀子ふ給より是紅毛画を摸写
せる物なり。

萬國新話巻之四終

水戸 赤水長先生閲
浪華宗吉橋本先生製譯
和蘭新譯地球全圖 全冊

和蘭冊の圖本數十を校閲し圖説を附す方域の精微諸番乃區別或ハ物産奇種の産地脚板相對の考證其他異聞珎説を擧且五帶三線二極黄赤道を明にし只地理の委きのミならず天文初學の一助ニ備ふ

華蠻通志 折本一冊 嗣出

寛政十二年庚申秋七月求板

大坂書肆 高麗橋一丁目 藤屋 浅野彌兵衛